

Prajñākaragupta (PVBh) に於ける有形相知識 説に関する一考察

岩 田 孝

法称(Dharmakīrti) (600—660 A. D.)の知識論が除々に解明されていくに従って、法称のみならず法称の著作の注解者達が、それを如何に解釈し、さらにどの様に彼等自身の知識論を展開したのか、という問題も研究の対象となってきた。こうした問題意識の下にこれまで Devendrabuddhi^① (=Devendra.), Śākyamati^① について述べたので、本論文にては Prajñākaragupta (=Prajñākara.) の PVBh に於ける知識論の一断面を考察したい。Prajñākara. の説く citrādvaita 説——知は多様な形相を持ちつつ不二であるとの説——を、有形相唯識説(唯識説でしかも知の中に形相の真なる存在性を肯定する説)を主張する Jñānaśrīmitra (=Jñānaśrī.) が自らの定説の論拠として用いている^③。それに依り Prajñākara. の citrādvaita 説に於けるの知識論的立場に有形相唯識説的要素のあることが示唆される。沖論文「citrādvaita」に於てはこのことが Prajñākara. 説の分析を通して明らかにされている。本論文の目的は、知の二相性(知の中に対象相とそれを把持する主観相との二相のあることの証明——特に、対象は、その知と必ず同時に知覚されることから、外境ではなく知の中の対象としての形相である故に、知には、知自身に本来ある主観相の外に、対象相が存在するとの証明——を中心とした Prajñākara. の知識論に於ても、citrādvaita 説の場合と同様に、有形相唯識説的傾向のあることを指摘する点にある。

I

上述の点に着目する思考の背景には当然、Prajñākara. に於ては、対象とその知との必然的同時知覚による知の有形相性の論証と、citrādvaita 説の論証との間に、構造的な近似性のあることが前提されている。その意味で直接、対象とその知との必然的同時知覚の分析 (cp. II.A.~II.C.) に入る前に、この前提が Prajñākara. にて実際に成立していることを述べておくのが妥当な手順であろう。そこでまず citrādvaita 説及び対象と知との必然的同時知覚説とについて最少限度必要な部分を概説し (I.A.~I.B.), 次に両説の近似性を検討する (I.C.).

I.A. Citrādvaita 説

I.A.1. 直接知覚 (現量 pratyakṣa) には分別 (kalpanā) が無いことの無矛盾性を示す議論の中で、法称は、多様な対象が感官知にて同時に知覚されるという事象を現量の喩例として認める。例えば眼識にて同時に青や黄等からなる多様の知覚される時点では、現前する多様が眼識に顯われているだけで、そこには未だ、「これは青なり」「これは黄なり」との分別(→対象を言

語と結びつけて表象すること)が入らないので、感官知としての現量の除分別 (kalpanāpoḍha) 性を示す例となるからである。その場合多様の知覚は、知に多様な形相の顕われることによって可能となるが、多様相には、青や黄等から構成されるという意味で、多数性 (→非一性) なる自性があり、一方知は、その本性上空間的に分割されないものであるから、単一性を自性とする、然るに非一性と単一性とは同一処 (→知) に共存できない、従って多様の知覚という事象には、知に多様相 (→多数体) が顕われると、知は自らの本性である単一性を失う、との矛盾が含まれている。それに対して法称は次の様に述べる。

「多様な [対象の] 知に於いて 青等は、[知を自性とするとの意味で] 知という限定を持つ [ので] (/or: [青なる顕現相の知という様に] 知を限定するもの[なので])、他 (→黄等) と一緒にない限り知覚され得ない (ananyabhāk/aśakyadarśanas.....) (PV III 220 abc') [1] 「知はある様相にて (→多様な (即ち非一なる) 実体と個々に区分されざる多様として) 顕われ (bhāsate)、[しかも] そ (の知) は [顕われた時点で] その様相の通りに感受される (anubhūyate)。それ故に多様な形相は知に於ては將に単一 (同一) (eka-) となるはずである」 (PV III 221) [2]

即ち直接知覚に顕われる青等の多様は各要素に分けられない (→多数なる物と個別化されない) 多様であり、その様に感受される多様はその時点では単一である、という意味であろう。従ってこの青等は知にあってても知の単一性に抵触しないことになる。この議論では、多様とは外界の物体ではなく知に於ける青等の形相であること、その意味で知が多様な形相を持つこと (→有形相知識説) が既に前提とされている。

I.A.2. Prajñākara. は、Devendra. の解釈を参考にして、^⑦ 多様相を持つ知と単一性との間を論理的により整えて、[1] [2] を次の様に注する。

「多様な [形相の] 知を自性とする青等は単独にて知覚され得ない (kevalo 'śakyadarśanaḥ)。従って知は [青や黄等の個々の実体的要素に] 弁別され得ないので (vivecayitum aśakyatvāt) 多様であっても必ず単一である (ekataiva)」 (PVBh p. 289, 26-27) ^⑧ [3] 「実に [あるものが] 知であることを否定してしまうと [そのものには] 弁別 (不)*[⊙] [可能性] は [あり得] ない、それ故に (→知のみが弁別不可能である故に) 知は、所取能取青 [黄] 等の形相を持つ限り多様であっても、必ず単一である (ekaiva)。従って [知は] 將に多様でありしかも不二である (citrādvaitam)……」 (PVBh p. 290, 12-13) ^⑨ [4]

即ち Prajñākara. の citrādvaita 説論証の骨子は

「単独にて知覚不可能なるもの、従って弁別不可能なるものは、単一 (同一) である」 [5] との論理から成る。また [3], [4] を導出する過程で、青等の多様について外界の多様と知の中の多様との区別を明確に立て、「[外界の] 多様は弁別可能であるから単一 (同一) ではない (aneka) が、知に於ける青等 [の多様相] は弁別不可能 (aśakyavivecana) [の故に単一 (同一) である]」 (PVBh p. 289, 22-23) ^⑩ と言う。これにより citrādvaita 説が、知の形相にのみ成立するので、知の有形相性に立脚する議論であることが明瞭になる。

I.B. 対象とその知との必然的同時知覚説

ここでは、前節の Prajñākara. の citrādvaita 説と、対象とその知との必然的同時知覚説とに構造的近似性があるということの大体の見当を付ける為に、前者での特徴——知の有形相性と知に於ける弁別不可能性——が後者に於ても見られることを簡単に示す（俱体的な同時知覚説の検討については、II.A.～II.C. を参照）。知の有形相性が直接論題となるのは知の二相性（知に於ける対象相と主観相との存在）の証明に於てである。法称は PV III^⑪ 及び PV in I^⑫ に於て、知の二相性の証明を多種挙げるが、両書に共通して記述されるのが、対象とその知との必然的同時知覚による非別体説である。

「対象は、必ず知と同時に知覚されている故に、そ（の知）と別である（anyatva）と如何にして証明されようか（証明されない）」(PV III 388)^⑬ [6]

「それ故に（一知なくして対象のみの知覚はなく、また対象なくして知のみの知覚もない故に）(cp. PV III 390)、知 [が対象を知覚する] 時点に顕現している [その] 対象が知と離別していないこと (avyatirekitva) は、否定され得ない」(PV III 391 abc) [7]

「青とその知とは必ず共に知覚される故に (sahopalambhaniyamāt) [両者に] 区別がない (abheda) (PVin I 55 ab)^⑭……恰も二月の如し」(PVin I p. 94, 18-23):

“nila taddhī → sahopalambhaniyama (論証因) → abheda (帰結)” [8]

以下この論証を sahopalambhaniyama 論証と呼ぶことにする。“sahopalambhaniyama” は「[青とその知との] 両者の中で [いずれか] 一方が知覚されないと、他方も知覚されない」(PVin I p. 94, 23-24) と注される様に、基本的には「一方を他方から離して（単独で）知覚することができない」と解される。これは、将に先に Prajñākara. が citrādvaita 説で注解した単独知覚不可能性（弁別不可能性）に外ならない。事実 Prajñākara. 自ら、この弁別不可能（性）(vivecayitum aśakyah) を sahopalambhaniyama 論証の説明に導入している (cp. PVBh p. 409, 26-28)^⑮。以上により citrādvaita 説の論証と sahopalambhaniyama 論証とには、少くとも、知の有形相性並びに弁別不可能性が共通して成立している、と言うことができる。

I.C. しかし両説の関連を確定するにはより詳しい検討が必要である。それは法称の場合に両説 ([1] [2] と [6] [7] [8]) の関連が必ずしも自明に成立していないからである。法称に於ける両説の相違点を列挙すると次の様になる。

(a) [1] [2] では多様な形相とは青や黄等の対象相であり、諸対象相間での弁別不可能性が問題となるのに対して、sahopalambhaniyama 論証 ([6] [7] [8]) では青とその知との弁別不可能性が問題とされる。

(b) 青や黄等の対象相は、sahopalambhaniyama 論証に於ては、「必ず同時に知覚されるものは別でない」(cp. [6]) の対偶（一別なものには必然的同時知覚はなし）の例として用いられる、即ち「[互いに] 別個な青と黄とには必ず [共に] 知覚されることは [成立し] ない」(PV III 389 cd)^⑯ という様に。法称は、[1] での “ananyabhāk/aśakyadarśanas” と sahopalambhaniyama との関連を Prajñākara. の様には直接語ってはいないし、仮りに、両者が単独で知覚され得ない

との意味で論理的に近似した内容であることから、[1] に於て *ananyabhāk/aśakyadarśanas* の代りに *sahopalambhaniyama* を代入しても、その場合には、青や黄等には *sahopalambhaniyama* が成立することになり、上述の“青と黄とには *sahopalambhaniyama* がない”という PV III 389 cd の言説と矛盾する。

(c) *sahopalambhaniyama* 論証 ((→[6] [7] [8]) での帰結は、法称の場合(対象と知とに関する) 別異 (→*anya*, *vyattireka*, *bheda*) の否定という型で表現され、同一性 (*ekatā*, *aikya*) との表現は見られない^⑩。例えば [8] の注では「青は、たとえ〔感受と〕異なっても (bhinnābhāsītve 'pi), 感受と別な体を (自) 性とするのではない (*na...arthāntararūpatvaṃ...*)」(PVin I p. 94, 20-21) と述べ、両者の顕われ方にある種の相違を認めた上で、しかし両者が全く別なものではないと主張しているが、青とその知は同一であるとは言っていない^⑪。Dharmottara もこの部分を注して、両者は勿論別ではないが、しかしそれは両者の同一性を意味しない、むしろ両者の区別が否定されるだけである (*bhedapratīṣedhamātra*) と解している (cp. II.B. 4.)。一方多様な形相の知覚 ([1] [2]) に於ては、明らかに多様相の同一性 (*ekabhāva*) が説かれる。従って、単独に知覚されないことによって導出される帰結が、[1] [2] (→同一性) と [6] [7] [8] (→区別の否定) とでは一致しない。

それに対して *Prajñākara*. 説に於ては上述の三点の相違は次の様に解消される。

(a. 1) *Prajñākara*. は “*citrākāra*” (PVIII 221 d) を「所取能取青等の形相」と解し、*citrākāra* の中に青等の対象相のみならず、所取相と能取相との組み合わせも含められることを示唆する (cp. [4])。Jina は、この部分の注に際し、明確に“(所取なる) 青等と (能取なる) 知”及び“青 (や黄) 等”と分解し^⑫、さらにそれらの非別異性を *sahopalambhaniyama* に基づいて帰結する：「青等とその知とが必ず共に知覚される故に〔両者に〕区別のない如く、青〔黄〕等も〔必ず共に知覚される故に〕相互に区別なし」(PVBhT (Ji) Ne 94 a³⁻⁴)。従って *Prajñākara*. の *citrādvaita* 説にも *sahopalambhaniyama* 論証での論題——所取 (→青) と能取 (→その知) との弁別不可能性の問題——が原理的に含まれ得る。

(b. 1) *Prajñākara*. は *citrādvaita* 説の論証にて、外界の多様は弁別可能であり、単一とならないのに対して、知の多様相の方は弁別不可能なる故に単一 (同一) であるという様に、青等の多様に二種あることを明記した (cp. I.A. 2.)。 *sahopalambhaniyama* 論証に於ても、一方では法称に従って、青や黄等の区別を意図する場合には (*bhedā[e] śyate*)、それらに *sahopalambhaniyama* が無いと認めながら (cp. PVBh p. 410, 8-10)、他方では、直接知覚としての知を自性とする多様相には *sahopalambha* が可能であり、従ってそこには同一性が成立することを間接的に認容している：

「[反論:] もしその様に〔別々な二つのものと思ひ込んだものでも、単一なる知に内入するが故に、本来的には同一であると *Prajñākara*. が主張する〕ならば、青と黄も共に知覚されている限り (*sahadṛśyamāna*) 多様な形相でありつつ、同一たることが是認されるべきである。[答:] それは〔将に〕その通りである。その場合にも多様な形相を持つ知の (自) 性は

単一であるが故に (saṁvedanarūpasya citrākāśasya...ekatvāt) (→知に於て共に知覚される多様な形相も単一 (同一) となる) (PVBh p. 410, 7-8)」

ここには“(青と黄とが) sahadṛśyamāna”とあり“niyama (必然的に)”に相当する語が欠けているが、共に知覚される青と黄とに同一性を認める以上、その同一となり得る青と黄とには必ず共に知覚されることも当然認められるので、特定の(→知に於ける)青や黄等には sahopalambhaniyama が成立することは Prajñākara. の認可するところであると言えよう。この様に青と黄とについて、外界の全く別個な多様(あるいは多様な物と分別される多様)と、直接知覚される(→同一化される)多様、という区別を明確にする時には、sahopalambha (niyama) (→弁別不可能性)が、後者の多様には成立するので、citrādvaita 説([1][2])での多様の弁別不可能性の記述と矛盾しない。

また Prajñākara. の citrādvaita 説は弁別不可能性によって説明され(cp. [5]), それはさらに自己認証に基礎づけられる。¹⁹同様なことが Prajñākara. の sahopalambhaniyama 論証に於ても見られる(cp. II.A. 2.)。

(c.1) Prajñākara. の場合 sahopalambhaniyama 論証の帰結は、法称の場合(→区別の否定)とは対照的に、積極的に青とその知との同一性であると説かれている(cp. [9]~[11.1]; II.B.)即ち Prajñākara. の citrādvaita 説の論証及び sahopalambhaniyama 論証に於ては、共通して弁別不可能性による諸形相の同一性が帰結されている。

以上により Prajñākara. に於ては両論証が内容的に同形の思考であることが理解され、それにより本論文の冒頭に述べた問題意識——Prajñākara. の知識論では citrādvaita 説に有形相唯識說的傾向があると知られる如く、sahopalambhaniyama 論証にも同様な傾向があり得るとの推察——の生ずる根拠が明らかになったと思われる。

II

上述の考察を踏まえて具体的に Prajñākara. による sahopalambhaniyama 論証を検討し、そこに有形相唯識說的傾向のあることを指摘しよう。始めに知の有形相性(II. A.~II. B.), 次に唯識性への傾向(II. C.)を順次示すことにする。

II. A. 法称が sahopalambhaniyama 論証を“知に二相(対象相と主観相)の存すること”の証明の中に位置づけよる以上(cp. I. B.), それによって知の有形相性の成立することは自明である。そこで単に知に対象相の存することから話を一歩進めて、知に於ける諸形相の在り方、即ち知と諸形相との関係の仕方——Prajñākara. はそれを知と諸形相との同一性であると捉えるが、その同一性の在り方——を解明する必要がある。その第一段階として、この節では彼の説く知と知の諸形相との同一性が如何なる論理から導びかれるのかを明らかにしたい。

II. A. 1 Prajñākara. による sahopalambhaniyama 論証の解釈を見よう：

「青と[その]知とは必ず同一である(ekam eva nilasaṁvedanam), [両者の一方が]存在し

(anvaya) [しかもその時に他方が] 存在しない (vyatireka), ということは [あり得] ないからである, 何となれば両者が互いに別々に知られない故に (anyonyavyatirekenādarśanāt) (PVBh p. 410,22):

“nila sarīvedana → an-anvayavyatirekitva (論証因) → eka (帰結)” [9]

「対象と知とは安危を同じくするので (abhinnayogakṣematva) 同一であることは否定され得ない, ……それ故に知は [対象の] 形相を持つこと (sākāraṁ jñānam) が証明される」(PVBh p. 410, 32-411,1):

“artha jñāna → abhinnayogakṣematva → eka” [10]

「[両者が] 安危を別にすること, これが, [両者の] 区別の原因である。然るに [眼病者に錯乱にて見られる] 二月の顛われは安危を別にしないので必ず同一である」(PVBh p. 410, 11-12) [10.1]

「[錯乱にて] 二月と思われたものは [本来] 不二 (→同一) である, 単一なる知に内入するが故に」(PVBh p. 410, 6-7):

“indudvaya (二月) (従って対象と知) → ekavijñānāntargatatva → advaya(eka)” [11]

「単一なる知に内入するが故に (ekapratītyanupraveśāt)こそ両者 (二月 従って対象と知) は [相互に] 対立していない (na...virodhaḥ)」(PVBh p. 410, 17) [11.1]

[9] にて anvaya を “(一方の) 有” vyatireka を “(その時に他方の) 非有” と解釈したのは Yamāri の注に依る。この Yamāri の解釈は Prajñākara. の言説と矛盾しない。例えば PV III 390 abc 「如何なる対象も知なくして [知覚されることは経験] されず, 又 [如何なる] 知も対象なくして知覚されることは経験され²⁰ない」は対象と知との sahopalambhaniyama を説明した言明であるが, ここでは “一方の有のとき, 他方の非有” の否定が意図される。これを Prajñākara. は “anvaya と vyatireka” の否定と注している (cp. [9]). 両者を対応させると, anvaya を “一方の有” vyatireka を “その時に他方の非有” と見なすことができる。

[9] での “anvayavyatireka の関係にないものは (→所遍), 同一である (区別なし) (→能遍)” という論理的な遍充関係は, 「[X と Y とに] anvayavyatireka [の関係があると, それ] が原因となって, この (両者の) 区別の分別 (bhedasya kalpanā) [が生ずる]」(PVBh p. 295, 13) [9.a] という Prajñākara. の区別に関する見解を, 否定的に表現した言明である。[9.a] によれば一般に両者 (対象とその知/眼病者に見える第一の月と第二の月) の中の一方のみが有 (anvaya), しかも一緒にあることが可能な他の方がその時に非有 (vyatireka) と決定することによって両者の区別が表象されるが, その決定の為には, 時間的に前後する二つの事象——一緒にあること (例えば自分が青を知覚するとき自分と青とが一緒にあること), どちらか一方が欠けること (例えば自分ではなく他人が青を知覚する時に自分がそこに居ないこと) (cp. PVBh p. 295, 14)——を対比させなければならない。²¹ 然るに直接知覚 (現量) は現在に現前する対象のみを認識するので時間的前後にある二事象に対して同時に作用することはできない, 従って, anvayavyatireka に基づく区別がある, との決定を直接知覚的に確証する認識手段が無いので, 真実には (→直接知

覚の場では) 区別がない、つまり同一性が成立する。即ち

「XとYとの anvayavyatirekaに基づき、XとYとの知覚より後の時点に生ずる所の(uttara-kālabhāvin), XとYとの区別の分別(bhedakalpanā)は、XとYとの直接知覚上で現前に認識され²⁴ない(na pratyakṣa pratitih)(cp. PVBh p. 410, 5-6)。直接知覚され²⁴ない区別は本来²⁵的には存在しない(paramārthato nāsti)(→同一性の成立)」 [9. b]

というのが Prajñākara. の基本的主張である。尚“一方の有とその時に他方の非有”の否定は、どちらか一方が単独で取り出せないの意味であるから、当然弁別不可能性に接続する。

[10] での abhinnayogakṣematva は、「一方の生ずる(乃至感受される)時は他方も[必ず]生ずる(乃至感受される)、逆に一方が減する(乃至感受されない)時は他方も[必ず]減する(乃至感受されない)」と解される²⁶。この様に両者が常に同じ振舞をする限り弁別され得ない、それによって同一(eka)と見なされる。従って [10] (abhinnayogakṣematva→eka) も内容的に弁別不可能性による単(同)一性の帰結と同型の見解である。

[11] での単一知内入性は、自己認証に於ては弁別され得ないこと、を意味している。「自己認証(svasamvedana)に於ては[知の]自身の相(svarūpa)について[自と他という]区別は[直接]認識され得ない²⁷」(PVBh p. 410, 2-3)と語っているからである²⁸。

II. A. 2. Prajñākara. の sahopalambhaniyama 論証 [9]~[11. 1] には、上述の解釈から知られる様に、直接知覚上での弁別不可能性が基本的に関係している。直接知覚上での、従ってその本質である自己認証上での、弁別不可能性は、それ故に、citrādvaita 説の論証のみならず、sahopalambhaniyama 論証に於ても本質的なポイントである。以下その内容を分析しよう。

知は青や赤等の形相を持っていても弁別不可能である(→単一である)(cp. PVBh p. 409, 27)²⁹との定説に対して、知にも現に対象相(→青や黄等)と主観相(→赤等)という区別の顕現(bhedapratibhāsa)が実在するとの反論が予想される。それに対しては一般に「[その]区別はしかし錯乱した知を持つ人々(bhrāntivijñāna)によって[のみ]表象されるであろう、恰も不二なる月[に対して二月と表象される]如く」(PV III 389 ab)³⁰と救釈される。Prajñākara. はこの救釈について次の二つの見解を挙げる：第一は通常に見られる解釈である：

「(a) 恰も、[表象自体は]単一³¹[でも]、二月との表象がある[故に]、[外界にある]唯一³²つの月を[対象と]しながら、[第一と第二の月という]区別の表象(bhedadarśana)がある如く、(b) 知の自体[を対象とする]場合にも[単一性を自性とする知に於て対象相(viśayākāra)と覚知相(bodhākāra)との両相が経験され、その両相は全く別なものと顕現する]³³」(PVBh p. 409, 30) [12]

第二はこの解釈の前半(a)を認めるが後半(b)を否定するとの反論である。

「(a) ある場所に[限定された外的]対象(→単一なる月)に対して[錯乱して二月と]区別を表象する[という]ことは妥当である、何となれば[対象が単一でも]知の中の相の区別[が区別表象を説明できる]から。(c) しかしそれ(知)の自体[が対象となる]場合には、どうして[知が異なる所取能取等の相を持てよう]か。その(知)そのものは([tadā]

〈tad〉eva) [自らと別な] 他の様相を呈し [得] ないからである。即ち (知の) 自身の相 (svarūpa) がその同じ (知) によって [自らの本性と異なった] 他の相として (pararūpeṇa gñān gyi ṇo bo(r)) どうして認識されようか, [もし認識されるとすれば] そ (の知の自相) が認識され [得] ないとの矛盾になる故に」 (PVBh p. 409, 30—32) [13]

Yamāri の注を参考にすると、上の二見解に対する Prajñākara. の評価はおよそ次の様に要約される。第二の見解 ([13]) では、知の中の形相は本来区別されないとの理由から、第一の見解 ([12]) での (b) の部分 (認識が外境に依らずに知自身の中で成立する場合に単一なる知の中に形相の区別を認めること) が否定されたが、二つの形相の区別とはある時に両方の有ることと、他の時に一方の欠けることとを比較して知られる故に、即ち継続的な分別の所産である故に、直接知覚的に認識されない (cp. [9. b]) という定説に立つ時には、如何なる場合にも (→外境の有無に関係なく) 直接知覚上で知の形相に区別を認めることは妥当ではない。その意味で第一の見解 ([12]) は知に区別相を認める限り、本来的には、(a) (b) 共に認可されず、第二の見解 ([13]) でも、外境に依らない場合に知の形相の区別を否定する (c) の部分は是認されるが、外境に依る場合に知の中の形相に区別ありとする (a) は否定されるべきである (cp. PVBhT (Ya) Me 402a²⁻⁴)。以上が Ppajñākara. の見解である。さらに Prajñākara. は、知の形相の区別不可能性を、他者も認める (c) の部分を一般化して、論述する。

「[知に固有な] 自身の相 (svarūpa) が、[互いに対立した自と他とに分けられない (単一なる) 様相とは] 異なって (→即ち他の相という区分を内に含むものとして) [直接的に] 認識され [ることは有り] 得ない、[知は自 (身の相のみ) を認証する故に、] [ということが他者にも認められる] 以上 (cp. [13] の (c))、他の相 (pararūpa) の方も自身の相として [直接的に] 認識され [ることは有り] 得ない (→仮りに他の相が [知の自身の相とは異なる特性を持って知] 自身にあると [思われて] も [直接知覚上で認識されない以上その] 形相は存在しない、従って [知の中に自身の相と対立した他の相を導入することは] 妥当ではない) ……即ち [知が知] 自身を [そのまま] 認証する (svasaṃvedana) 場合には、[その知] 自身の相に関して [相対的な自と他の分という] 区別は認識され得ない」 (PVBh) p. 410, 1-3)

[14]

一般に自己認証にては知の諸形相の区別は否定されるが、それは多様相を有する知すべての否定を意味しない。知 (多様相) は単一性を失わない限り自己認証される (→是認される) と言う：「一方知は、多様相 (楽 (→主観相) や青等 (→対象相)) を持っても、必ず単一であるならば自己認証にて [多様な実体へと区分されざる所の多様として] 認識され得る……」 (PVBh p. 410, 3-4)

以上の言説により [14] に於ても知 (知の諸相) に関して自己認証に基づいた弁別不可能性が成立し、さらに弁別不可能性のみならず単一 (同一) 性も意図されていることが読み取れる。つまり知 (知の諸形相) は単一 (同一) でなければ自己認証されない、逆に「知 (知の諸形相) は、自己認証される故に弁別不可能となり、それ故に単一 (同一) である」と Prajñākara. 説を理解できる。結局、単一知内入性による同一性の導出 ([11][11.1]) は「諸形相は単一知に内入すると

き自己認証され、その場ではすべて自身の相として全体的に知覚されるので他の相の存在する余地はない、従って対立関係にある自と他とに弁別不可能である故に同一である」との意味になる。尚この思考は、Prajñākara が citrādvaita 説にて知に於ける区別の顕象を否定した論理に近似している。この様に自己認証が基底にある以上、Prajñākara の sahopalambhaniyama 論証に於ては、citrādvaita 説の場合と同様に、認識論的に外的存在の無意味となる（→否定される）契機が含まれていると言えよう。

II. A. 3. sahopalambhaniyama なる論証因は諸論師によって多種に語義解釈される。例えば法称自身は少くとも「必然的同時知覚」(sakṛd evōpalambhaḥ) の意味に解し、また Devendra. (及び Śākyamati) は「同一としての知覚」(ekopalambha) (→ekatvenōpalambhaḥ) の意味に、あるいは Dharmottara や Kamalaśīla は「(対象の) 知覚と (対象を把持する知の) 知覚とが同一」(eka evōpalambhaḥ) の意味に解する。それとは対照的に Prajñākara. に於ては、語義解釈はあまり問題とされず、むしろ sahopalambhaniyama に相当する部分は、[9]～[11.1] に見る様に、別な表現で置き換えられている。しかし、これらは、表現こそ異なっている、内容的には「弁別不可能性による同一性」という考えを基底としていることは、既に示した通りである (cp. II. A.1)。所で Devendra. (Śākyamati) の sahopalambhaniyama 論証を思い出してみると、それは「青とその知とは同一として知覚される故に同一である」という型の (→自性因 (svabhāvaḥetu) による) 論証であった。「同一としての知覚」という論証因は、対象とその知との同一性を導く為の強力な論拠にはなるが、他方では同一との知覚そのものが論証されるべき事柄であり、同一知覚を前提にした同一性の導出は、“同一だから同一” という tautology に墮し兼ねない。Prajñākara. が citrādvaita 説に於ては Devendra. 説を踏襲しながら、sahopalambhaniyama 論証では Devendra. と全く別な方法で、即ちより説得力のある「弁別不可能なるが故に同一」との遍充関係に基づいて注解したのは、そうした過失を避ける意味もあったのではないかと推察される。

II.B. Prajñākara. による sahopalambhaniyama 論証に於けるもう一つの特徴は sahopalambhaniyama によって帰結される 青とその知との関係が、彼自身の解釈を述べる箇処では圧倒的に両者の同一性となっている点である (cp. [9]～[11])。この青とその知との同一性は、Dharmottara の説——両者の区別の否定のみ (bhedaḥpratiṣedhamātra) で、両者に同一性はなしとの説 (cp. II. B. 4.) ——と異なる見解である。この両見解の相異が知識論上にどの様に反映するかを見る為にも、Prajñākara. の説く同一性が如何なる意味での同一性であるか、を明らかにする必要がある。sahopalambhaniyama 論証の範囲内ではこの点に関する論述が無いので他の箇処から補うことにする。一般に A と B との同一性は A と B が共通した特性を持つことから導かれる。そこで対象とその知に関して、共通する特性を抽出し同一性の内容を分析しよう。

II. B. 1. 感覚的所知覚性 (aparokṣatā, pratyakṣa (prati) vedyatva)

II. B. 1.1. 認識対象 (所量, prameya) と認識手段 (量, pramāṇa) と認識結果 (量果, pramāṇaphala) とは別体であると Nyāya 学派等は主張する。彼等に対して三要素は「すべて全く同一のものに完全に帰属する故に (ekatraiva sarvaparisaṃpṛteḥ) (PVBh p. 401, 21)」同一であ

ることを納得させる為に、Prajñākara は、楽等（一心所）の行う認識の際に成立する三要素の同一性を依り処として、その同一性が青等の認識に於てもそのまま成り立つと論を展開する：楽等は修習（bhāvanā）により自らの中に生じ、それが自らにて認識されるので、楽等に自己認証が結果として成立する、従って楽等は所量と量と量果とを兼ね合わせる故にこれら認識の三要素は同一である^{④②}。「青等の認識に於ても、楽等*^{④①}の認識に於ける如く、[三要素の同一性は成立する]……どちら[の認識]に於ても[楽等又は青等は]自身の相にて[自らを]感受するからである（svarūpeṇa vedanāt）」（PVBh p. 401 23-24）。これに対して、楽等は心的作用を持つから自ら自身を知るといふ能取相を持つとしても、心的なものではない青等の自性は楽等の如くには能取相を持ち得ない^{④③}（cp. PVBh p. 401, 25-26）との反論が出される。この反論はしかし、「[楽等は]自己を顕現する（svaprakāśa）との特性を持つ故に[自己を認識できる]、恰もアトマンの如し」（PVBh p. 401, 26）とある様に、楽等に於ける自己顕現説を前提として認める、さらに自己顕現が“感覚的に知覚され得ること”（aparokṣatā）も認める。この様に反論者にも共通に認容される議論の基盤を固定した後に、Prajñākara は反論に対して論駁する：

「それら青等も、[楽等と同様に]感覚的に知覚され得るとの（自）性を持つ故に、感受を本性とする（anubhavātmaka）[と認められるべきである]。従って[感受そのものである青等には]将に楽等に於ける如くに自己認証の[成立する]可能性がある、何となればそれら青等は[自身以外の]他の要素によって感覚的に知覚されることはない故に」（PVBh p. 402, 1-2）[15] まず自他共に認める aparokṣatā（感覚的所知覚性）なる特性を対象契機と思われていた青等に見出し、その特性が感受（anubhava）の特性でもあることから青を感受と同化し、次に感受を自性とする点で青等と楽等とに共通性を認め、それにより楽等に成立する自己認証が青等にも可能であると論じている。つまり任意の青ではなく感受を自性とする青が青によって青を感受することが可能と帰結する。これにより青等の認識に於ても認識の三要素（一青と青を把持するものと青としての知）が同一のものに帰属するとの定説が支持される。この議論に於て aparokṣatā は、対象契機のみと思われている青に感受なる主観的契機を自性とさせる為の重要な条件である。従って aparokṣatā は間接的には青の自己認証、さらには青の認識に於ける三要素の同一性を可能にする。ここには aparokṣatā による青とその知との同一性も含意されると言えるであろう。

II. B. 1.2. あるいは、青等の対象契機が aparokṣatā を通して感受を自性とする、という場合、青と感受との自性関係から直接的に青と感受（一知）との同一性も含意され得る。一般に外境論に立つ“青の感受”という事象に於ては、感受される青（一外境）と感受する知とは別体であると表象されるが、それに対立する法称説——「それ（知の本性である感受）は何か（知自身より）別なもの（一外境）についての[感受]ではない」（PV III 326 b^{④④}）——を注して Prajñākara は次の様に言う：

「[外境論者は、直接知覚にて知られる対象は外界の存在である、と思っているが、]直接知覚的に感受される（pratyakṣavedya）のは、[知の中に]その[対象]相が存在することのみであり、[知を]離れた[外的]対象が[直接的に感受されるのでは]ない。[世間上]そ

の[知にある]形相のみ(eva[m])が[青の感受という場合の]青[に相当する]と語られるが、それ以外は[感受の対象と言われ]ない。それ故に青の感受とは、青を自性として持つ感受[との意味]である(nilātmako 'nubhavo nilānubhavaḥ)。[“青の感受”と表現されても青と感受とが自性上同一であることは]例えば“ひき臼の本体”(śilāputrakasya śarīram)[と表現されても、ひき臼と本体とが同一である]如くに[成立する]；何となれば[“ひき臼の本体”とはひき臼なる本体を意味し、従って[ひき臼]なる語が“本体”なる語に対して“ひき臼の本体”という様に]第六格の意味[で表現される]というだけで[両語にて示される事柄が]別[であること]にはならないからである(PVBh p. 352, 12-14)^{④⑤} [16]

直接感覚的に感受される青は、知にある青なる形相である。一方感受の方から見れば青の感受とは感受が青そのものになることである、従って“nilasyānubhava”と nila (青) が第六格で表現されても、青と感受とは自性の関係にある以上別ではない、というのが上述の論旨である。ひき臼と本体との自性関係を表わす“śilāputrakasya śarīram”は、“ひき臼即本体”を意味するので、両者の全くの同一性を示している^{④⑥}。これにより Prajñākara は、感覚的に感受される(pratyakṣavedya)ことを通して、青と感受(→知)とが自性の関係で結ばれ、しかも単に離れていないのみならず全く同一である、と解していたことが理解される。^{④⑦}

II. B. 2. 顕現 (pratibhāsa, prakāśa)

前節では対象契機と主観契機とが、“感覚的に知覚されること”を共通な特性とする故に、同一と見なされる場合を示した。Prajñākara はまた、他者をして aparokṣatā と顕現 (prakāśa) との同義性を是認させている (cp. PVBh p. 401, 26-27)。そこでこの節では両契機の同一化条件としての顕現について考察しよう。

II. B. 2. 1. 先に青と感受とが自性の関係にある為の根拠として、感受されるものは知の形相であることが述べられたが (cp. [16])、こうした考えは有形相知識説から導かれるであろう、即ち「知が[対象の形相を自らの中に持たずに]単に存在する[だけでは](sarvittisattaiva) それ(特定な対象)についての感受 (vedanā) が[成立し]得ない、[もし知が対象相を持たずに対象認識可能とすると]、そ(の知)は、如何なる(対象)に対しても[常に自らの内容を変えずに]同じを[状態にある]故に、[特定な対象を他の対象から区別]限定[して認識でき]ない、との矛盾に陥る故に」(PVin I p. 68, 2-4)^{④⑧}、従って知は感受される対象の形相を自らの中に持つべきである、との有形相知識説から導出されると思われる。その場合、所知対象は外界の物ではなく、知に顕現した限りでの対象相となる。もし対象と顕現とを全く別なものと切り離せば、対象は永遠に知に顕現しない故に知覚に入らないとの矛盾になる、従って対象の知覚は“対象即顕現”という場で考えられねばならない。Prajñākara も言う：「およそ知(覚)されるものそののみが是認される。実に顕現に〈入っている〉(pratibhāsāntargata)*⁽¹⁾ 限りでの青が[知に]顕われる(avabhāsatē)(→知覚される)、他のもの(顕現より外にある青等)は[顕われてい]ない。従って[青と]顕現とが分離(vyatireka)していると[定立する]*⁽²⁾ 根拠は[何も]ない。……[反論:] 顕現に〈入った〉*⁽¹⁾ そ(の青)が顕われる(→知覚される)のではない。顕現は内的なものであり、

一方、青等は外界にて顕われる故に。[答:] [それは正しく] ない。[仮りに青が外界にあり、それと] 離れた [内的なもの (楽等*⁽³⁾の心的作用や知*⁽⁴⁾)] が 単に現前するとしても、そ[の外界の青] は [本来顕現と別体なるが故に] 顕現 [という特性] を持てない [即ち知覚されない]。そ(の青) は [むしろ] 自らの本性に従って感覚的に知覚されるが故に (svarūpeṇāparokṣeṇa) [知に於て] 顕現する (pratibhāsana) からである。』(PVBh p. 389. 1-4)。即ち「能取相が、自らの本性に従って感覚的に知覚されるものであるが故に、他の能取の存在に依らずに [知覚される] 如く^⑤、その能取と同時にある (samānakāla) 青等も [同様に自らによって感覚的に知覚されるのである]」(PVBh p. 389, 6-7)。これらの言説により、自らによって感覚的に知覚され得る青等は、その知と同時に知に顕現するもので、外界の青ではないことが理解される。その意味で「知には青としての顕現がある」(darśanam nilanirbhāsam) (PV III 335c) と言うことができよう。一方これを青の方から見れば、青は、顕現である以上、外界の物ではなく知に属する形相である、との意味に解される。

II. B. 2. 2. この様に顕現を媒介とした 対象契機と主観契機との同質化の論理を Prajñākara は外境論者に対して時折使用する。

(a) 例えば、対象と知との別体を説く外境論に対して、その知が自己顕現する (svaprakāśa) か否かの排中律を適用し、その両方の場合に矛盾を指摘することにより外境批判を行う中で、第一の場合にこの論理が用いられる。外境論にて知が自己を顕現することを認めるとしても、対象は顕現する知とは異質別体であるから、知が自らのみを顕現しただけで対象の方も顕現されたと、言うことはできない、従って対象の認識の成立する為には対象自身も顕現しなければならない (cp. PVBh p. 354, 8-9), もしそうであれば「そ(の対象)も [知が顕現する] 将にその時にその様に(→知と同様に) 顕現する (prakāśate) のであるから、どうして他のもの(→知)がそれ(対象)を顕現する [必要が] あろうか。何となればその時(→対象とその知とが同時に顕現する時)には所顕現と能顕現との区別は無いからである (na...viśeṣaḥ prakāśyaparakāśakayoḥ)」(PVBh p. 354. 9-10)。他者は対象と知とを別体と見るが、対象が知の特性である顕現を持つ限り、その対象は知に同化される、との論旨である。

(b) 対象の知 (A) とそれを確定する知 (B) について、後者は自己自身を顕現するが、対象の知 (A) の方は別な知 (B) によって認識されるので自己を顕現しない、との反論に対して、両知共に自己顕現する故に両者には所顕現能顕現という関係はない (cp. PVBh p. 448, 8) (→知はすべて自己認証する) との説が法称の定説である。その説明で、対象の知が自己顕現することを示す為に Prajñākara は言う:「[通常] 顕現ではないものを他 [の顕現するものが] 顕現する [というのは合理とされるが], 顕現するもの (x) 自体を [も, 他の顕現するもの (x) が], [YはXの相を受け取ってXと同じ相を持つという] 同類性があるだけの理由で, [顕現すると、考えるのは正しく] ない [、この二つの事は世間一般に極成している]。[しかし] 本来的には (param-arthataḥ) 顕現ではないものを顕現することも [有り得] ない (aparakāśasyāpi na...prakāśaḥ)。」[問:] [それでは顕現ではないはずの] 対象はどうして顕現する [と言えるの] か? [答:] 対

象は〔知覚に顕われる限り〕それを（自）性とするから、即ち顕現を自性とする故に、顕現する (prakāśarūpeṇa prakāśate), しかし他（の能顕現）にて顕現されるのではない」(PVBh p. 448, 6-8)。知の対象 (X) が顕現という特性を本質上持たないならば、Xはどの様にしても顕現のない状態に止まるはずである、然るにXが知に顕われるという経験的事実は、Xが自らにて顕現を自性とすることを含意する、との意味であろう。かくして対象が顕現を自性とする場では対象は自らにて自らを顕現する：「燈火全体（→集合因）(?)によって瓶はそれ（顕現）を自性として生ずる（→知覚に入る）(?)、それ故にその（瓶）も自己顕現する限りに於て顕現する (prakāś [y]ate), [それ] 以外には〔顕現し〕ない」(PVBh p. 448, 12-13)。その場合、所顕（→対象）と能顕（→知）との区別は一方の有 (anvaya) とその時に他方の非有 (vyatireka) によって分別して、一方から他方を排除すること (apoddhāra) から行われるが(cp. [9. a] [9. b]), 本来的にはその区別は存在しない(cp. PVBh p. 448, 13)。この様に（自己）顕現なる知の特性を対象契機にも認める時、所顕と能顕との差異は消滅して、両者の顕現による同一化が含意される。

(c) 法称の経量部説に立った対象認識の分析に於ては、認識を決定する手段（量）は知の中の青等の形相であり、その手段によって得られた結果（量果）は青等についての知である、しかもその両者には同一性が成立する。⁵² それに対して、もしこの様に「知が〔ある対象 (X) の〕形相を持ち、〔その知の中の形相によって任意の対象ではなく将に X についての知が生ずる意味で、形相としての知が〕認識手段となり、〔しかも〕その(知)がそのまま、〔認識手段にて決定された“Xの知”という意味で、認識結果である（→法称の定説）、とするならば、作用手段(karāṇa)と〔その手段にて生ずる結果としての〕作用(kriyā)とが同一〔という、常識に矛盾した事柄を認めること〕になってしまう」(PVBh p. 348, 17) との反論が当然予想される。しかしこの事は矛盾ではない。Prajñākaraは、作用手段（乃至作用するもの）と作用という区別は分別上仮設されたものであり、その分別を除けば（→本来的には）両者の示すものは同一である、従って区別と同一とは別々な場で成り立つ事象であるから矛盾ではない、という意味の救釈を述べている。例えば Devadatta がある時ある場所に住止し (sthāna), 後に移動すること (gamana) から、彼に二つの作用の区別が想定され、また作用者と二つの作用との区別も想定されるが、本来は、唯一人の Devadatta のみが存在し、作用者も作用もすべて Devadatta に帰せられる(cp. PVBh p. 348, 30-32)。従って上述の作用手段と作用等の区別は、本来同一のものが見方の相違に依って別々に分別され表現されたまでである。Prajñākara はこのことをさらに対象相と知との同一性に結びつけて次の様に説く：

「同様に〔対象の認識に於ても対象形相と知とは、仮りに区別されるが、本来的には同一である、即ち世間上では、〕“〔対象〕形相も〔対象〕知すべてに遍在するのではない(ākāro 'pi na [phala-] <sakala- > adhigativyāpakah), 一方〔対象〕知の方は〔対象〕形相すべてに遍在する,” [と] こうした〔外延上の大小の区別を分別すること〕により、〔認識結果としての〕〔対象〕知(pramiti)と認識手段(pramāṇa)（→対象形相）との区別が立てられるが(bhedavyavasthā), 本来的にはしかし〔対象〕形相は顕現している以上そのまま〔対象〕知である(paramārthatas tvākāra eva prakāśamāṇaḥ pramitiḥ)。それ故に〔対象〕形相が認識手段で、対象知(arthasa-

invedana)は〔認識〕結果であると〔仮りに分けられるが、本来〕〔認識〕結果は認識手段と不離である、又は認識手段はそれ(認識結果)と〔不離〕である」(PVBh p.349, 1-4) [17] 一般的には対象形相は知の一部分(→知に内在する青の相、黄の相、能取相等から構成される諸相の中の一所取相)と見なされる故に、対象形相の外延は知の外延よりも小さいと分別されるが、本来的には“対象形相 即 (eva) 知”であると言う。この“eva”は前後の文脈からして両者の外延上の同一性を示す(→anyayogavyavaccheda)と解される。対象形相と知とがどちらから見ても互いに別でないとして [17] の終りに述べられていることも、両者が全く同一であることを補っていると言えよう。さらに [17] には両者の同一性を媒介する条件として、“顕現しつつある (prakāśamāna)”ことが明記されている。つまり [17] の“本来的には……”は“後の時点の分別が入らない、しかも感受の作用する現時点に顕現している場に於ては、対象形相は、対象知と完全に同一である”との意味に捉えることができる。

II. B. 3. 以上により対象と知とは、感覚的に知覚され得ること (aparokṣatā, pratyakṣa (prati) vedyatva) 並びに顕現 (pratibhāsa, prakāśa) という特性を共有する場では全く同一である、というのが Prajñākara. の定説と考えられる。さて Prajñākara. が“必ず共に知覚されること”によって帰結した対象とその知との同一性は、自己認証の場での事象であった (cp. II. A. 2.), 一方自己認証に於ては当然 aparokṣatā 及び prakāśa が成立する、従って sahopalambhaniyama 論証に於ても、その帰結である同一性は aparokṣatā 及び prakāśa を媒介にした同一性で見なされ得る、その様な同一性は、上述の Prajñākara. の定説によれば完全なる同一性である、従って sahopalambhaniyama 論証に於ても、対象とその知との全くの同一性が成立していると言えよう。

sahopalambhaniyama 論証では、この同一性により、対象とは外境ではなく知に存在する対象形相である、と示すことが中心課題である。それ故に両者の全くの同一性は、対象形相が知に吸収されて皆無になるという同一性を意味せず、知の有形相性がそのまま残された同一性とするのが妥当であると思われる。その事は、Prajñākara. 自身が sahopalambhaniyama 論証にて対象と知との同一性を帰結した後に“それ故に知は〔対象〕形相を持つ”(cp. [10])と語る中に端的に表わされている。即ち対象形相が本来的に知と全く同一なる意味で知に存在するとの Prajñākara. の見解に於ては、対象形相が単に所知相という知の一部分のみではなく、すべての点で知と同じ在り方をする、つまり知の存在性の肯定される限りで、対象形相も全く同様にその存在性が肯定される、という有形相知識説が成立していると言えよう。

II. B. 4. Dharmottara の sahopalambhaniyama 論証との比較

上述の Prajñākara 説と対比する為に Dharmottara の解釈を簡単に述べておこう。彼は [8] での sahopalambhaniyama による帰結“対象とその知との abhedā”について、勿論“両者の別体”を否定するが“両者の同一性”との解釈も排去し、“区別の否定のみ”(bhedapratishedhamātra)と解すべきであると主張する (cp. PVinT (Dh) Dse 182b⁸-183a¹)⁵⁴。その論拠になる部分を以下に選び出してみよう。彼の説によれば一般に「顕現する (snañ ba) (→経験される) 限りのものそれがそのまますべて真で〔あるとは言え〕ない、錯乱 (bhrānti) によって存在しないものでも顕現

するからである」(ibid. 182b⁸)。実際「無明の機能と相応した知は真ならざる相 (asatya rūpa) を顕現せしめるが故に、無明に依って真ならざる相が顕現する (prakāśate, gsal ba)」(ibid. 184b⁶)⁵⁵ ということは不合理ではない。「もしあらゆる場合に顕現する (snañ ba) ものすべてが [真なる] 存在であるとするならば、Brahman でさえ如何なる知をも錯乱して表象できない [との矛盾になろう]。あるいは真ではなくても [知に顕現するものが] あると [譲歩すれば、それを認める以上]、Indra でさえも真ならざる (形相) を顕現させる知の機能 [のあること] を否定できない [はずである]。[この様に] 誰も、感受はすべて真であると、たとえ [それを] 願っても、確立することは不可能であるから、知にある真ならざる [相] を顕現せしめる機能を超 (克) [でき] ない」(ibid. 184b⁸-185a²)⁵⁶。即ち「感受 (anubhava) でも、[そこに顕われる相につき] 能破する (bādhaka) [認識根拠] が経験されるが故に、妥当性の失われる (visamvādaka) [ものもあり]、それは捨棄されるべきである、恰も二月を自性とする (知の) 如く」(ibid. 185a³)、一方「喜 (harṣa) 等を自性とする真なる感受 (yañ dag pa'i (P) rig pa) (→自己認証) は捨棄されるべきではない、[それを] 能破する [根拠] が無いからである」(ibid. 185a⁴⁻⁵)⁵⁷。この様に顕現していても真ならざる形相が知には現実に認められる。従って対象相 (偽) と知 (→真) とが同一となることは有り得ない、「それ故に [sahopalambhaniyama によって帰結された対象と知との “abheda” (cp. [8]) とは] 同一 [性を意味し] ない、と確立される」(ibid. 185a⁵)。「もし [両者が同一であると仮定すると] 所取相が顕現はしても真ではない場合、知も [所取相との同一性の為に真ではなくなる、となればその知について一般的に認められる] 真実 [性] をどの様にして認識 [でき] ようか (できない)」。[この矛盾は対象と知との同一性の仮定より生ずる、従って同一性は不合理である」(ibid. 183a²⁻³)⁵⁸。こうした理由から Dharmottara は “abheda” (非区別) を “同一性を意図しない区別の否定のみ” と解する。この解釈は彼の構成した論証式に於ても一貫して読み込まれている。

「ある (X) がある (Y) と必ず共に知覚されるとき、X は Y より離れていない (na vyatiricyate), 例えば [眼病者に見える二月の表象に於て] 第二の月が [第] 一の月より [離れていない] 如く。青等の所取相も知と必ず共に知覚される [、従って知より離れていない]。区別とは “共に知覚される為の必然性の無いこと” によって遍充される、[区別あるものには、必ず共に知覚される為の原因である] 相関 [性] (pratibandha) が無い故に。その (共に知覚される為の必然性の非有) と対立したものが必ず共に知覚されることである。[区別を論理的に] 能遍するもの [が相関性の非有、従って共に知覚される為の必然性の非有であり、それ] と対立するもの [が、必ず共に知覚されることであり、] その [必ず共に知覚されることの] 認識 (-upalabdhi) によって [相関性の非有が否定され、従って] 区別が否定される」(PVinT (Dh) 189b⁷-190a¹)⁵⁹

[18]

上式では第一の月は知に、第二の月は所取相に相応している。第一の月は現実の月と対応がつくので真であり、第二の月は全く偽であるから、両者の同一性は成立しないが、二月の表象として知に顕われる限り両者は全く別ではない。従ってこの喩例は “対象 (相) (→偽) と知 (→真) との区別の否定のみ” という Dharmottara の主張を良く表現している⁶⁰。また帰結の部分 “na vya-

tiricyate”での否定詞“na”は動詞と結びついている。そうした否定詞は、否定される事柄以外のものの肯定を意図しない純粹否定(→prasajyapratiṣedha)の機能を持つ、という否定詞に関する規則に従うと、この帰結は単に離れることの否定のみを含意し、それを越えて積極的に同一性の肯定を意味しない。⁶²これも上述の Dharmottara 説に合致している。逆に否定詞が名辞に結びつく場合、例えば abrahmaṇa が kṣatriya 等を意味する様に、否定詞“a”は否定される事柄以外のものを肯定する意味での否定(→paryudāsa)として機能する。⁶³[18]の sahopalambhaniyama 論証での帰結が仮りに“avyatiriktaṃ”とでも表現されていれば、そこには“離れる”こと以外の事柄即ち同一(性)、が含意され得るであろう。⁶⁴Prajñākara.によって積極的に説かれた対象と知との同一性は“abheda”をこの paryudāsa によって解釈した場合に相当しよう。

この Dharmottara の見解に於て否定されるべき同一性とは、知が自らの本性である真実性を捨棄して対象相に同化され、その対象相の特性である非真性を持つようになること、即ち対象相と全く同じ特性を有し対象相に完全に同一化されることを意味する。その場合勿論両者の全く別なることも否定される。従って Dharmottara の言う“同一性を意図しない区別の否定のみ”とは、「対象相が外境にはなく知に顕現することを認める点で、両者は全く別体でもなく、また対象相は非真で知は真である点で、両者が全く同一でもない」との意味に解せるであろう。この解釈での対象相は「対象(相)は知と全く同一で知と同じ在り方をする」という Prajñākara. 説でのそれと明らかに異質である。さらにこの対象相は、真ではなくまた真なる知と同一となり得ない限り、最終的には否定される傾向を持っている。例えば先程の Dharmottara 説——対象相は顕現しても知の如くには真ではない、もし対象(相)と知との同一性を認めれば、知も対象相と同様に真ではなくなる矛盾に陥る、それ故に両者の同一性は成立しないとの説(cp. PVinT (Dh) Dse 183a²⁻³)——に対して、「知が真ならざる(形相)を顕現させるならば、真なる(形相)も〔同様に〕顕現させる、〔従って本来的にはその〕真なる〔形相が存在する〕ので〔上述の形相を持つ知が偽となる様な〕如何なる過失にも陥らない……(?)……」(ibid 183a³)との反論(?)を予想し、それを論破する為に Dharmottara は、真とされている対象相が単一性を自性とする場合と非一性を自性とする場合を設定し、そのいずれに於ても矛盾のあることを指摘する。⁶⁵一般に単一でもなく非一でもないものは存在しない、従ってここには真なる対象相の存在性の否定が含意されている。また“対象(相)と知とは(全く)別体でもなく(全く)同一でもない”という Dharmottara の見解は、知に真なる形相の存在性を認めない無形相(唯識)説を主張する Ratnākaraśānti に於ても否定されていない。⁶⁶以上の点を考慮に入れると、Dharmottara 説は、形相の非真性を極端に形相の非存在性と捉えられるとき、無形相知識説に展開する契機を含むと言えるであろう。

こうした Dharmottara 説と比較すると、先述の Prajñākara. の sahopalambhaniyama 論証に於ては、対象(相)と知との同一性及び知の有形相性が積極的に肯定されるので、対象相のみが偽である為に知から引き離されて否定される、という要素は全く無い、従ってこの Prajñākara. 説には、対象相は知の存在を認める場で知と同様に真となる、という有形相知識説に向う可能性

が読み取られよう。

II. C. sahopalambhaniyama 論証に於ける唯識性

sahopalambhaniyama 論証による知の二相性の証明に於ては、最初から有形相（唯）識説の範囲内でのみ対象は知に同化されると証明しても、その証明は知の有形相性を前提にして知の有形相性を帰結したもので（→siddhasādhana⁶⁷）無意味となろう。従って議論の過程としては知に形相の存在を認めない有外境論者に対して、彼等が知と同時に存在する対象を外境と思っているが、それは実は知の中の形相であることを、納得させるのが当面の目的となる。ここでは経量部の認める外境（推論によってのみ知られ得る対象）は問われていない。その意味で法称の言説——「それ故に（→sahopalambhaniyama と受証（rig pa）という二論証因によって）顕現する対象と知とは区別がない〔と証明される〕、たとえ外境が存在するとしても」(PVin I 59ab)⁶⁸、及び「しかし外境を〔議論の〕依り所として、〔知の〕二相性が説かれる。そしてその（二相性）は〔対象と知とが〕必ず共に知覚されることから証明される」(PV III 398 bcd)⁶⁹——に於ては、sahopalambhaniyama 論証は有外境有形相知識説（→経量部⁷⁰）の側から（有外境無形相知識説に対して）立量される時その効力を発揮する、という立量の立場が示唆されている。しかし経量部の言う外境とは直接知覚されることなく常に間接的に要請されたものである、即ち色彩等の認識は、識の所縁が無いと、他の補助縁（眼根、光等）があっても生じない、しかし実際に認識は生ずる。それ故に所縁が存在しなければならない、それが外境である、と分別されたものである。外境が直接知覚されない以上それを積極的に主張する根拠は薄くなろう。諸々の事象（対象認識、因果関係⁷¹、推論）が外境の前提なしに知の中の形相にて説明可能と証明された時点では、なおさらのことである。それ故に Prajñākara. は不確実な外境を前提しない唯識説の方が合理的であると考え⁷²る。特に Prajñākara. による sahopalambhaniyama 論証の場合、自己認証がその基底にあり（cp. II. A. 2.）その究極に於ては外境存在は不可欠な要素ではなくなる。従って前述の有外境説に立った知の有形相性を肯定する段階を通過した上で、その外境に反省が加えられ、外境の役割を知の相続（santāna）に仮設された形相が受け持つ時には、sahopalambhaniyama 論証は外境に依らずに（→従って唯識説にても）構成され得るであろう。以下の Prajñākara. の言説はこの事を暗に示している：外境を認める無形相知識説によれば、能取のみとしての知が、ある時に青を、他の時に黄を把持するので、能取は各刹那を通して対象とは別個に自己同一なるものとして存在する、同様に同じ青がある時は知と同質な（→能取としての）楽によって、又ある時は知と同質な（→能取としての）苦によって把持されるので、対象も外界に自己同一なるものとして存在する⁷³、従って対象と能取（→知）とは必ず共に知覚されることもなければ同一でもない、と論ぜられる。しかし“対象又は能取が各刹那に於て常に自己同一である”との認識は、直接知覚（pratyakṣa）によって立証されない、現量は時間的前後関係（pūrvāparabhāva）にある事象と同時に作用できない故に。現量にて知られない事は、推論（anumāna）によってそのままの在り方で認識されることは尚一層不可能である⁷⁴。なるほど世間上同一性が表象される場合もあろう、例えば山に煙の立つのを見て、かの山には以前に竈で経験したのと同じ火があると推論する場合

の様に、しかし同一と見なされたその火は、火以外のものを排除することにより分別された一般相(sāmānyalakṣaṇa)としての火であり、個々に知覚された火が本来的に(paramārthataḥ)同一^{②⑥}と言うのではない。直接知覚と推論という正しい認識の根拠(pramāṇa)によって“外境及びそれに対立する能取の各刹那に於ける自己同一的存在性”を、分別を導入せずにその本来の在り方に於て、確立することが不可能である以上、能取(→知)と外境(→知の対象)との別体を主張する論拠は崩れることになる。

「同様にこの[知の二相性の議論]でも、その(一方)が[以前にあった能取相と]全く[同じ]能取相であり、その⁽¹⁾他方)が[以前と]全く[同じ]青であり、今もその[能取相]と離れて存在する、という様に[→即ち所取相は各刹那を通じて知のある相続上にあり、又能取相も知の別な相続上にあるという様に][各形相がそれぞれ互いに別な相続を持ち、しかも個々の]相続⁽²⁾に於て[自己]同一であること(santānābheda)を[仮りに]認容した後に[のみ]、所取[相]と能取[相]との区別なり、覚知なる本性(bodharūpa)と青[等]の形相[という区別]が、[仮りに]立てられる。従って本質的には[両者の]区別が[成立しているのでは]ない、[その区別とは、]一般(sāmānya)(相)に基づいて表示上ある(prajñaptisat)[とされている知の]相続に於て、[仮りに設定されるに過ぎない]*⁽³⁾。[本来的には]しかし真実に存在する⁽⁴⁾自相(svalakṣaṇa)に基づいて、[対象相と主観相とが]必ず共に知覚されることのみ[が成立する]、それ故に[両相の]非差異(→同一性)のみが真実である」(PVBh p. 416, 30-33)^⑦ [19]

この様に知の相続上で一般相によって対象相と主観相という区別が仮りに立てられるが、本来的には両相は、直接知覚される自相の状態では、共に知覚される為の必然性を常に有し、従って同一である、という Prajñākara. の見解は、将に sahopalambhaniyama 論証が唯識説にても立量され得ることを示している。先述の様に Prajñākara. の sahopalambhaniyama 論証が自己認証に基づく弁別可能性によって導出されること、しかも自己認証はその究極に於て外境に依らないとの意味で唯識性を含意することから、Prajñākara. の場合 sahopalambhaniyama 論証による帰結がそのまま唯識説にて受け入れられる要素を持っている、そしてその帰結が対象(相)と知との同一性であり、しかも知の有形相性である限り、唯識説に立って sahopalambhaniyama 論証が立量された場合でも、形相の方だけが否定されねばならない理由はないであろう。また Prajñākara. は、唯識的傾向の見られる sahopalambhaniyama 論証の記述 [19] の直後に「さらにもし知が形相をは、持たないとすれば、その時にはそ(の知)は常に全く純粋な(suddha)[ままたまに止まる]であろう、そうであれば[知には]鮮明(な相)、不鮮明(な相)あるいは混迷した相[等の異なった相が顕われ]ない[ことになろう]。しかし[実際には]感官が正常であるかないか等によって知には多種の相が」異なる様相にて[顕われる][→この矛盾は知の無形相性より生ずる、故に知の有形相性は成就する]……」(PVBh p. 416, 33-34)と、知の有形相性を意図して別な証明へと話を進めているが、ここには、直前の sahopalambhaniyama 論証にて知の有形相性の成就していることも前提となっている。この様に Prajñākara. に於ける sahopalambhaniyama 論証は、本

来的な場合には、唯識説に立って対象相と知との同一性を帰結し、しかも知の有形相性をも保証する。一方その同一性は、II.B.1.~II.B.4. に示された様に、形相が知と同様に真であり得る様な知の有形相性を含意しているので、これを合わせ考えると、Prajñākara. に於ては、sahopalambhaniyama 論証によって有形相唯識説的傾向の肯定される可能性があると言えるであろう。

法称の注解者の中で Prajñākara. (/Ravigupta)⁷⁸ と同様に sahopalambhaniyama 論証の帰結を(対象と知との)同一性と解するのは Devendra. と Śākyamati である。Derendra. の場合には当該の箇所の記述が簡単な為に知識論的な立場を直接取り出せないが、形相を偽と見る Dharmottara は、形相を真と見る対論者の説として“Devendra. の説く対象と知との同一性”を批判している⁷⁹ので、間接的に Devendra. が有形相(唯)識説に立つことが推察される。また Śākyamati は、Śāntarakṣita によって有形相唯識説に立つ論師と見なされ批判される、しかも Śākyamati 自身、明確に青等(の形相)が知に存存することを示す為に sahopalambhaniyama による両者の同一性を使用する(そこでは“区別の否定のみ”の解釈は否定される⁸⁰)。同じく両者の同一性を主張する上述の Prajñākara. の見解は、將にこの Śākyamati の有形相唯識説に近いと言える。一方対象と知との区別の否定のみを説く Dharmottara 説は、知が真であるのに対して形相の偽なることを前提にするので、究極的には形相の非在存性を内に含み、Ratnākaraśānti 説との接近性から察せられる様に、無形相唯識説へ進展する契機を持っている。従って Prajñākara 説は知識論的に Dharmottara 説と異質であり、Devendra, Śākyamati の系列に属すと考えられる。⁸¹

以上の要約

1. Prajñākara に於ては、法称の場合と異なり、sahopalambhaniyama 論証と citrādvaita 説の論証との間に構造的な類似性があり、そしてそれが意識されている(I.A.~I.C.)。

2. Prajñākara. による両論証の根底には諸形相に関する弁別不可能性があり(I.C.)、それはさらに自己認証に於ける弁別不可能性に基づく(II.A.2.)。

3. Prajñākara. は sahopalambhaniyama 論証([9]~[11])での帰結として積極的に対象(相)と知との同一性を主張する。その同一性は、他の箇所の記述によれば、対象(相)が、知の本質的な特性である aparokṣatā(感覚的に知覚されること)や prakāśa(顕現)を持つ状態に於ては、知と全く同じ在り方をすると意味で、対象(相)と知との完全なる同一性と捉えられる。こうした同一性は、知の真なる存在性が認められる場で、対象相も同様に(真として)存在するという有形相知識説を可能にする(II.B.1.~II.B.3.)。

4. 法称の PV III (388-392ab; 398) に於ては、sahopalambhaniyama 論証は、戸崎博士の御指摘の如く、主に経量部的な立場から立量されたが、Prajñākara. の場合には唯識的立場からも立量され得ることが、Prajñākara の記述の中から読み取れる。そのことは、Prajñākara. の sahopalambhaniyama 論証の根底に自己認証があり、その自己認証は、最終的には外境に依存せず知自身の中で認識の成就すること(→従って唯識性)を含意することからも、示唆される(II.C.)、従って Prajñākara. の sahopalambhaniyama 論証は、唯識説に立っても、対象(相)とその知との同一性を帰結できると考えられる。

5. この“同一性”はしかし当該の法称の言明中には見られない。法称は対象（相）とその知との“abheda”（非区別）をむしろ“両者が別体ではない”（→区別の否定）という意味に解する。Dharmottara はさらにこの点を明確にし、対象相を偽、知を真と見る質的な相違を前提にすることによって、両者の“abheda”とは、積極的な“両者の同一性”を示すのではなく、“区別の否定のみ”に止まるべきであると主張する。この Dharmottara 説では、対象相は偽と見なされるので、究極的には対象相の非存在性が認容される可能性を内含する。こうした対象相に対する否定的な見解は、上述の Prajñākara. 説には全く見られない。このことから Prajñākara. の説く対象（相）と知との同一性は、対象相が知と同様に知に於て真として存在すること（→有形相説）を含意すると解される（II. B. 4.）。しかもその有形相性が sahopalambhaniyama 論証に於ては唯識的立場に立っても成立し得る。それ故に Prajñākara. の sahopalambhaniyama 論証には、Śākyamati と同様に、有形相唯識說的傾向の肯定される契機があると考えられる。

尚 Prajñākara. 作と伝えられる Sahopalambhaniyamasiddhi は、テベット訳のみで、その訳文の乱れが甚だしく、さらに PVBh の解釈と異なる点が多い為に、今回の分析の対象には含まれていない。間もなくその訳が発表される予定である。

注

- ① cp. 拙稿「Śākya.」: 「Devendra.」.
- ② 本論は拙稿「Ein Aspekt des Sākāravijñānavāda bei Prajñākaragupta (PVBh)」(印仏研, Vol. 31, No. 1, p. 469~p. 466) を内容的に補ったものである。
- ③ Jñānaśrī. の有形相唯識説は無形相唯識説を主張する Ratnākaraśānti⁽¹⁾への論難⁽²⁾等⁽³⁾から知られている。
 - (1) 注 ⑥ 参照
 - (2) cp. 梶山「Controversy」p. 34~37.
 - (3) 例えば Ātmatattvaviveka (=ĀTV) の注解者である Śaṅkaramiśra は、ĀTV で批判される有形相唯識説 (ĀTV (Bibliotheca Indica) p. 453, 3~5) を Jñānaśrī. の説と見る, cp. ĀTV p. 453, 15~16 ([dvi]<ci>tra-) = JN p. 363, 9~10.
- ④ cp. JN p. 461, 14ff.
- ⑤ cp. PV III 197~207; 戸崎「仏教認識論」p. 298~308.; Vetter “Ekenntnisprobleme” p. 67~69.
- ⑥ [1][2] は沖「Dharmakīrti (citrādvaita)」p. 92; 戸崎「仏教認識論」p. 317 に訳出。
[1] の Devendra. による解釈については拙稿「Devendra.」p. 3 参照。
[1] は SyVR p. 173, 10~11; SiVinT p. 65, 9~10; Nkum I p. 125, 21~22 に、また [2] は SiVinT p. 65, 11~12 に引用される。その他の引用文献及び variant については沖、戸崎両論文、PV-k (宮坂) 参照。
- ⑦ cp. 拙稿「Devendra.」, III. A. 1.
- ⑧ cp. PVT(R) Phe 112a⁷⁻⁸. [3][4] は沖「citrādvaita」p. 92, p. 26 に訳出
- ⑨ cp. PVT(R) Phe 113a^{8-b2}; NBhūṣ p. 116, 3~4.
- * (1) Tib. Te 331b³: śes pa^D ma rtogs pa ni^D rnam par dbyer med par^D yod pa ma yin no//
により、否定詞を補う、<a>vivecanam (?)
- 1) Skt. と対応せず、Skt. によれば、śes pa <ñid>...[ni]<na>...med pa[r]...となろう、cp. PVT(R) 113b⁴: śes pa ñid spaṅs na ni dbyer med pa ma yin te/

- ⑩ cp. Nkum I p. 126, 1~2; PrKM p. 195, 1~3; SiVinT p. 65, 13~14. 沖「citradvaita」p. 92に訳出。
- ⑪ cp. PV III 368~425; 戸崎「Pramāṇa.」(8); 同 ⑨; Vetter「Erkenntnisprobleme」p. 72~76
- ⑫ cp. PVin I p. 94, 17~p. 100, 6.
- ⑬ Sahopalambhaniyamasiddhi (Peking No. 5753) (296a²⁻³) に引用される (Texta の読み: yul [min] <ni>). [6] [7] は戸崎「Pramāṇa.」(8) p. 101, p. 103; Vetter「Erkenntnisprobleme」p. 74に訳出。
- ⑭ sahopalambhaniyama は既に桂論文:「ダルマキールティに於ける「自己認識」の理論」(桂紹隆), 南都仏教, No. 23, p. 1~p. 2にて注目され, その後 sahopalambhaniyama の議論内容に関して諸々の論文が提出されている: 太田心海「認識の対象に関する考察 Tattvasaṃgraha, Bahirarthaparīkṣā の和訳研究 (上)」佐賀龍谷学会紀要, No. 14, p. 54~p.58; 松本「Sahopalambhaniyama」; 戸崎「Pramāṇa.」(18) p. 101~p. 109; 神子上「Śubhagupta (sahopalambha.)」p. 5ff.; 拙稿「Bemerkung」等参照。PVin I 55ab を引用する文献については上掲神子上論文注⑬参照。
- ⑮ cp. 拙稿「Devendra.」, III. B. 1.
- ⑯ cp. PVin I p. 96, 6~7: tha dad pa la ni de (=sahopalambhaniyama) rigs pa ma yin te/sñon po dañ ser po bzin no// PV III 389cd は戸崎「Pramāṇa.」(8) p. 102に訳出。
- ⑰ cp. PV III 388~391abc; PVin I p. 94, 17~p. 98, 6; 拙稿「Bemerkung」, II. b. 2).
- ⑱ Jñānaśrī. も同様に解す, cp. JN p. 462, 5; 沖「citradvaita」p. 89.
- ⑲ PV III 221ab ([2]) への Prajñākara. の注は Ravigupta の注を参考にと次の様に解される: 知は以前に青と黄との二相を持って顕われ, また今は青なる一相のみを持って顕われるという場合, 知はそれぞれの時点で二相あるいは一相を持つものとして感受される。⁽¹⁾「しかし[その事のみから, 今ある知の内容とは別な様態で]感受された (anubhūta) (知) があった, と[の区別が真実に存在すると]は[言え]ない。⁽²⁾何となれば自己認証[を本性とする]直接知覚 (svasaṃvedanapratyakṣa) は, [現在感受している知の中に顕われた形相のみを確実に認識する故に,] [以前に別な様態としてあったという]感覚的に知覚されない (parokṣa) (過去の事象) に対しては[確実性を持って]作用[でき]ないからである」(PVBh p. 290, 2~3). 即ち自己認証は現在的にのみ作用する故に, そこでは時間的前後関係に依る区別表象が成り立たない, 従って多様な相を持つ知の弁別不可能性 (→単一性) が成立する。この見解は, Prajñākara. に於ける sahopalambhaniyama 論証での論理, [9. b], に類似する。

(1) cp. PVT(R) Phe 112b⁶⁻⁸

(2) cp. PVT(R) Phe 112b⁸~113a¹. 尚 “dir sñā phyi (pūrvāpara) ‘i śes pa dag ...tha dad par rig par bya ste/(A) da ltar byuñ ba’i śes pa’i ŋo bo ŋid lkog tu gyur pa (parokṣa) la ‘jug pa ma yin pa’i phyir ro// (B) des bas na ŋams su myoñ ba yod do (→anubhūtam āsit) zes sñar gyi la śes pa ‘jug pa ma yin no// (C)” の A と B の太字の部分は文脈的連続性を欠く, (B) はむしろ (C) (定説) の理由と見なせる。一方 (A) は定説 (C) と対立する見解である。筆者は (A) を反対者の説 (又はそれへの譲歩) と解した。あるいは A で否定詞を補うべきか, ...rig par <mi> bya te/ (? ?), この場合には (B) は (A) の理由となる。

- ⑳ 例えば現在時点に瓶が顕現する (→知られる) との事象では, 瓶は現在以前及び以後の時点にも存在し, 一方顕現 (→知覚) は前後の時点にはない。その場合, 前後の時点に瓶の存在するのが anvaya で, 顕現の存在しないことが vyatireka と Yamāri は考える。あるいは他人のみが対象を知覚する場合に, 対象の存在が anvaya でその場に居ない自分の身体は vyatireka と見なされる。Kamalaśīla も同様な解釈をする。⁽³⁾

anvaya と vyatireka は, 法称によれば, 原因と結果の関係を記述する場合にも使用される: 「知の対象は [対象知を生じさせる] 原因である。何となれば [知に自らの相を] 与える能力を [対象は] 持つので。[X が, X の] 存在 [する場合] と欠除 [する場合に応じて] (anvavyatireka), [それ

それ X についての知の存在と欠除とを] 相応させないならば, [Xは] [知の] 原因ではない」(PV in I p. 56, 5~7) (イ)。つまり anavavyatireka と原因結果との関係は次の様に表現されよう:

「Xのある時Yがあり (anvaya) しかもXが無いときYも無い (vyatireka), という関係がXとY とに無ければ, Xが原因でYが結果という因果関係もない」(ロ)

(イ) を [9] (an-anvavyatirekitva → eka) に応用するには「XとYとに因果関係なければXとY とに 同一性 あり」との遍充関係を前提する必要がある。即ち「XとYとに anavavyatireka の 関係なし→従ってXとYとに因果関係なし→それ故にXとYとに同一性あり」という様に。しかし一般には, 因果関係にない二者は, 例えば牛の両角の如く, 必ずしも同一となるわけではない。従って (ロ) を [9] にそのまま応用するには無理があると思われる。

一方 Yamāri による “anvaya (一方の有) と vyatireka (その時に他方の非有)” の否定は, どちらか一方を単独で取り出せないことを意味し, 同一性を示すのに困難は生じない。

(1) cp. PVBhT (Ya) Me 428a⁷ (PVBh p. 448, 13 への注)。

(2) cp. PVBhT (Ya) Me 277a⁵⁻⁶ (PVBh p. 295, 14-15 への注)。あるいは自分自身が対象を認識する場合, 自分の身体は知の側にあり (→anvaya), 外境はそれとは別な所にある (→知の側になり) (→vyatireka) (cp. PVBhT (Ya) Me 277a³⁻⁴ (PVBh p. 295, 13 への注))。その他 PVBhT (Ya) Me 402a⁵⁻⁶ (PVBh p. 410, 5 への注) 参照。

(3) cp. TSP p. 706, 19~20.

(4) (イ) での anavavyatireka を因果関係と結びつけずに, 文字通り「一方があれば (必ず) 他方あり (anvaya), 一方なければ (決して) 他方もなし (vyatireka)」(ハ) という表現のみから見ると, (イ) は, 両者が常に同じ在り方をする (→区別されない) との意味で同一性を帰結し得る。これは [10] の安危同分 (abhinnayogakṣematva) に近似する。しかし今の場合「anavavyatireka の否定が同一性を帰結する」(cp. [9]) というのが Prajñākara. の定説である。[9] での an-anvavyatireka の中に (イ) として定義される anavavyatireka. を代入しても, an-anvavyatireka は「一方あれば他方あり, 一方なければ他方なし, は成立しない」即ち「常に同じ在り方をしない」との意味になって同一性を帰結しない。従って (イ) の意味での anavavyatireka も [9] の anavavyatireka に適合しない。

尚, 法称は因果関係を継時的と認めるので, XとYとの anavavyatireka を, 「因としてのXが先にあり, その後に果としてのYがある」とし, さらにそこに刹那減性を導入すれば, 「Xのある時には, Yは未だなく, Yのある時には, Xはもはやない」が得られる。これを改めて anavavyatireka とすれば, これは「一方の有 (anvaya) の時に他方なし (vyatireka)」という Yamāri 説に接続する。

②① NVinV I p. 269, 21~22 に引用される (anartham vā). 戸崎「Pramāṇa.」(88) p. 103 に訳出。

②② cp. PVBh p. 410, 18~19: 「それ故に, [知は] 単一でも二相を持つと分別によって言詮される。即ち anavavyatireka に基づいて」; ibid. p. 335, 4, p. 448, 13.

(1) ekam eva. しかし Tib. The 88b³⁻⁴ では (des na) gcig po de ñid.

(2) Tib. The 88b⁴: rnam pa gñis so zes rtog[s] pas に従って [tasya-] <dva-ya>ākāram と読む。

(3) ...ucyate, anavavyatirekābhyām. Tib. 88b⁴: rjes su 'gro ba dañ ldog pa dañ brjod pa yin no// の dañ は不明。

②③ cp. PVT (R) Phe 167a³⁻⁵ (PV III 390 への注): 「区別の言詮 (bhedavyavahāra) は anvaya と vyatireka とによって [生ずる故に] [本来的には] 全く存在しない⁽¹⁾ (med pa kho na), anvaya と vyatireka とは [時間的] 前後 [関係] に立 [脚] するからである: 直接知覚 (現量) は [時間的] 前後 [の事柄] に [作用し] ない, それ (現量) は現前のもののみを捉える故に。さらにそれ (現量) が [前後の事柄を如実に把持でき] なければ, 推論 (比量) [もそれを如実に把持でき] ない。それ故に時 [場所] 等による区別は [本来的に] 決して存在しない。

- (1) cp. PVBh p. 410, 29 (: bhedavyavahāras tv anvayavyatirekābhyām atāttvika eva...) に従って訳した。
- ②④ cp. PVBh p. 295, 16; p. 295, 23; p. 355, 4.
- ②⑤ cp. PVBh p. 410, 19 (Tib. The 88b⁴: rjes su 'gro ldog gi (D) [gis (P)] dños po (de nīd) により ...anvayavyatireka-[a]bhāvam と読む); ibid. p. 410, 29.
- ②⑥ cp. 拙稿「Devendra.」, 注 ⑤④.
- ②⑦ 類似した見解は, Prajñākara. の citrādvaita 説にも見られる, 注⑤参照。
- ②⑧ Jina の注では自己認証内入性が弁別不可能性 (→sahopalambhaniyama) の根拠又は同義語として強調される, cp. PVBhT (Ji) Ne 206a³ (PVBh p. 410, 2~3 の注); Ne 206b⁴⁻⁵ (PVBh p. 410, 17); 206b⁵⁻⁶ (PVBh p. 410, 23).
- ②⑨ cp. PVT (R) Phe 116b²⁻³.
- ③⑩ Nkand p. 304, 5 等に引用される。戸崎「Pramāṇa.」(8) p. 102 に訳出。この偈文を引用文献については上掲戸崎論文及び神子「Śubhagupta (sahopalambha.)」注②参照。
- ③⑪ “ekam ekatraiva (candramasi)” に Tib. は相応しない: PVBh (Tib) The 97b⁶: (zla ba) gcig nīd la[s]. (ekasminn eva (candramasi) (?)). Yamāri 注も Tib. 訳に対応する: PVBhT (Ya) Me 401b⁷: phyi rol gyi zla ba gcig nīd la zla ba gñis su mthoñ ba nīd kyis tha dad par mthoñ bar 'gyur ba... (外界にある唯一の月を [対象としながら] 二月と表象することによって [第一と第二との月の] 区別表象が生ずる……)
- ③⑫ Yamāri の PVBhT (Ya) Me 401b⁷⁻⁸ 注を参考にした, cp. PVT (R) Phe 166b⁴.
- ③⑬ Yamāri の注 PVBhT (Ya) Me 401b⁸~402a² を参考にした。
- ③⑭ Jina の注 PVBhT (Ji) Ne 206a²⁻³ (PVBh p. 409, 34 への注); ibid. 206a⁴ (PVBh p. 410, 3 への注) を参考にした。
- ③⑮ cp. PVBh p. 288, 3ff. (沖「citrādvaita」p. 87)。Ravigupta の注は [14] に相当する部分を欠くが, その代りに citrādvaita 説の論理をそのまま使用して次の様に述べる: 「[区別は錯乱した者のみ経験されるが] 本来的には (don dam par) 多様な形相を持った (知) (citrākāra) は単一として顕現する, 区別することができない (the dad par byed mi nus pa) 故に」(PVT (R) Phe 166b³)。
- ③⑯ cp. 拙稿「Bemerkung」, <7>, <11>.
- ③⑰ cp. 松本「Sahopalambhaniyama」p. 34 注 ⑥①; 拙稿「Bemerkung」, III. b.
- ③⑱ cp. PVP che 261b³ (PV III 335 の注); 拙稿「Bemerkung」, III. c. 1.
- ③⑲ cp. 拙稿「Devendra.」, III. A. 1.
- ④⑩ cp. PVBh p. 401, 19~20: catasṛṣu caivamvidhāsu tattvaṁ parisamāpyate, pramātā prameyaṁ pramāṇaṁ pramītir iti.
- (1)=Nyāyabhāṣya (Nyāyadarśana, Chowkhambha S.S. p. 9, 1) (Nyāyasūtra 1. 1. 1 への注), 但し, tattvaṁ は arthātattvaṁ となっている。
- ④⑪ cp. PVBh p. 401, 16. Tib. (The 78b⁵: bde ba la sog pa...) により [arthādayo] <sukhādayo> と読む。PVBh p. 311, 20; p. 313, 8~9; 313, 17 等も参照。案が物質的なものではなく, 知と同質であることの証明に於て, 案等を生起する原因は知の生起因と全く同一であるから, 案等は知と同質であると定言される (cp. PV III 251~254)。この中に, 案等は, 慧 (prajñā) と同様に修習によって生じ, 自己認証を本性とする, という議論が含まれている。
- (1) Tib. (Te 360b¹: bsgom pa 'phel ba las) によれば bhāvanā-<udaya>[uyada]- (?) か。
- ④⑫ cp. PVBh p. 401, 16~17.
- ④⑬ cp. PVT (R) Phe 159a⁴⁻⁶.
- *① Tib. The 78b³ により [artha-]<sukha>.
- ④⑭ ...samvedane nātmabhūto grāhakākāraḥ...と読む。Tib. The 79a²⁻³ にも否定詞を欠くが, この箇

所に相応する PVT (R) 159a⁷ には否定詞が付せられている。

- ④⑤ NVin V I p. 305, 20 に引用される。戸崎「Pramāṇa.」(6) p. 38 に訳出, PVin I p. 86, 19~20 も同内容:「(それ故に感受 (anubhava) は將に知の自性であり,) それ (感受) はまた何か (外的なもの) についての [感受] ではない。」
- ④⑥ cp. PVT (R) Phe 147b⁷~148a¹ (mñon sum [gyi]<du>(?!)).
- ④⑦ 同様な見解は PVin I p. 86, 23~25 (≒PV III 328cd) に対する Jñānaśrībhadrā の注にも見られる。PVinT (Jñ) We 236a⁵⁻⁶:「[反問:] もしその様に [知は自らにて自らを顯現すると定説する] ならば, [“nīlānubhava” (青の感受) を] “nīlasyānubhavaḥ” という様に第六格 [を用いて表現すること] はどうして妥当となるうか? …[答:] 青の自性それがそのまま感受であるが故に (sñon po^{ci} rañ bzin de ñid ñams su myoñ ba yin pa^{ci} phyir), 青もそれ (→知) であり [勿論] 感受もそれ (→知) である, そのことから青の感受が成立する (sñon po yañ de[r] yin la myoñ ba yañ de yin pas sñon po myoñ ba ste/), 恰も “青蓮華 (nīlotpala)” [との表現では “青” と “蓮華” とが同じものを示している] 如く」。尚 Śākyamati は, この青と感受との同一性を, sahopalambhaniyama による対象と知との同一性と, 同類の事象と捉えている。その場合, この同一性は, 青等 (の形相) の知に於ける存在性を保証する意味で, Śākyamati に於ける有形相 (唯識) 説的傾向を示す依所となっている⁽¹⁾。

(1) cp. 拙稿「Śākya.」p. 155~p. 156.

- ④⑧ 同様に「…青等自身は, 他のもの (青等以外で青等を把持するもの) によって知覚されない (→直接的に自らにて知覚される) 故に, そのまま (eva) 感受である (nīlādyātmaivānubhavaḥ)」(PVBh p. 352, 21) にも, 青と感受との同一性が含意されていよう。
- ④⑨ PVin I p. 68, 2~4: na hi sañvittisattaiva tadvedanā yuktā, tasyāḥ sarvatrāviśeṣād aviśeṣaprasaṅgāt. この箇所は多くの文献に引用される。
- (a) Bhāmatī p. 542, 10~11; p. 544, 14~15; Nkaṇ p. 256, 16~17; Nkand p. 297, 12, p. 298, 1; Sarvadarśanasamgraha (Vidyabhawan Skt. Granthamala, No. 113) p. 80, 21.
- (b) Prakaraṇapañcīkā (Baranas Hindu Univ. Darśana Series, No. 4) p. 174, 3~4; Rjuvimāla (Chowkhamba S.S., No. 391) p. 60, 21~22; Ślokaṇvarttikavyākhyā p. 245, 2~3; Śāstradīpikā (Bombay 1915) p. 53, 23~24.
- (1) (a) では sañvittisattaiva (但し Nkaṇ, Nkand, Sarvadarśanasamgraha では vittisattaiva), (b) では sañvittisattayaiva.
- (2) Nkaṇ 以外の (a) には欠。

- ④⑩ PVT (R) Phe 151a²⁻⁵ にも同様な議論が見られる。

* (1) Tib. (The 65a⁵⁻⁶: snañ ba^{ci} nañ du chud pa...) により pratibhāsāt tadgatam, pratibhāsāt tadgatam を改める。

* (2) Tib. (The 65a⁵⁻⁶: snañ ba las tha dad par ni tshad ma med do//) も pratibhāsavyatirek-
eṇa na pramāṇam に相応するが, この場合 pramāṇa が何についての pramāṇa かが不明である。
Yamāri の注「sñon po snañ ba las tha dad par rnam par gnas pa (vyavasthā) la ni/tshad
ma ci yañ med de/」(PVBhT (Ya) Me 388a³) に従って訳した。

* (3) cp. PVBhT (Ji) Ne 175a⁷: nañ gi bde ba la sogs pa.

* (4) cp. PVBhT (Ya) Me 388a⁴⁻⁵: śes pa tha dad pa yod pa yin na/

- ⑤① Tib. (The 65a⁸: dper na) により [atha]<yatha>iva.
- ⑤② 量果=量の議論についてに, 戸崎「仏教認識論」p. 394ff. 参照。
- ⑤③ Tib. The 22b⁴: rtogs pa thams cad kyi khyab byed... による。
- ⑤④ cp. 松本「Sahopalambhaniyama」p. 281ff.; 拙稿「Bemerkung」, II. b. 2) 及び ad 2); PVinT (Bu) 157, 7.
- ⑤⑤ PVinT (Dh) Dse 184b⁶ (=SyVR p. 170, 17~19): avidyāśaktiyuktam jñānam asatya rūpam ādar-

śayattī avidyāvaśāt prakāśata (ity ucyata ity anavadyam).

- ⑤⑥ Bu ston も同様な見解を述べる, cp. PVinT (Bu) 158, 4~5.
- ⑤⑦ 「[ある事柄に対して, それを] 能破 [する正しい認識根拠 (pramāṇa)] が無い故に [その事柄は] 錯乱であると証されない」 (PVinT (Dh) Dse 185a³⁻⁴~PVin II (Steinkellner) p. 45* (Ce 284a⁸) =PVSV (Gnoli) p. 16, 4~5: bādhakābhavād bhrāntyasiddheḥ) との言明に依る。
- ⑤⑧ yañ dag par (D) rig pa は saṃvitti (saṃvedana) の訳語ともなり得るが, PVin I p. 68, 2 で saṃvitti を rig pa と訳しているので yañ dag pa を “sam-” の訳語と捉えなかった。
- ⑤⑨ 松本「sahopalambhaniyana」p. 281 に訳出 (<rtogs (P)>[rtog (D)])
- ⑥⑩ PVinT (Dh) 189b⁷~190a¹ は Dravyālaṃkāraṭīkā⁽¹⁾ に引用される:
yad yena niyatasahopalambhaṃ tat tato na vyatiricyate, yathaikasmāc candramaso dvitīyaḥ, niyatasahopalambhaś ca jñānena saha grāhyākāro nīlādīḥ. bhedāḥ sahopalambhāniyamena vyāptāḥ pratibandhābhavāt, tasya viruddhaḥ sahopalambhaniyamaḥ, tena vyāpakaviruddhena bhedo nirākriyate. cp. Nkaṇ p. 261, 6~12 (Text の読み: tat tato <na>; [a]bhedo; sahopalambha-<a>-niyamena).
松本論文は, Jitāri がこの論式を知の形相を偽とする説と見て批判したことを, 指摘している。
(1) cp. Jambūvijaya 「Jainācārya... dravyālaṃkārasvopajñāṭīkāyām baudhagranthebhya uddh-rtāḥ pāthāḥ」, Studien zum Jainismus und Buddhismus, Hamburg, p. 137.
(2) Tib. (PVinT (Dh) 190a¹) では des na khyab par byed pa ‘gal ba dmigs pas.
(3) cp. 松本「On the philosophical positions of Dharmottara and Jitāri」印仏研, Vol. 29, No. 2, p. 967~966.
- ⑥⑪ cp. 拙稿「Bemerkung」, III. c. 2.
- ⑥⑫ 仏教徒の捉えた二種の否定 (prasajyapratishedha と paryudāsa) については, 梶山「Three kinds of affirmation and two kinds of negation in Buddhist philosophy」, WZKS, Vol. 17, p. 167~174 参照。
- ⑥⑬ TS 2029 は sahopalambhaniyama なる論証因の帰結として二種の可能性——“avyatiriktam” と “navibhidyate”——を挙げる。それは, 将に paryudāsa (→前者) と prasajyapratishedha (→後者) とによって, 前者は“同一”, 後者は“区別の否定のみ”と解釈され得ることを示唆している, cp. 松本「Sahopalambhaniyama」p. 279; 拙稿「Bemerkung」, III. c. 2.
- ⑥⑭ “gal te rnam par śes pa... bden pa yañ gsal bar byed de/bden pas ni űes pa cuñ zad kyañ byas pa med pa’i phyir ro//” の後半部分は記述が簡単すぎて文脈を正確に読めない。Bu ston は Dharmottara の “abheda=bhedapratishedhamātra” に関する議論 (PVinT (Dh) Dse 183a¹~185a⁵) を要約して述べている (PVinT (Bu) 157, 7~158, 6)。その中で上記の部分は次の様に記される: “gal te śes pas mi bden pa gsal bar byed pa bzin du bden pa yañ gsal bas rnam pa bden no űe na/” 即ち対象 (相) (→偽) と知 (→真) との同一性を否定する 為 に導入した形相の非真性 (定説) に対して “知の形相は真である” との反論となっている。この反論を Bu ston は, その様な真なる形相は単一としても非一としても存在しないと, 論駁する (次の注参照)。今はこの Bu ston の解釈に従って試訳した。
- ⑥⑮ 所取相の単一性の否定: PVinT (Dh) 183a⁴ff. (; PVinT (Bu) 158, 1)
所取相の非一性の否定: PVinT (Dh) 183b³ff. (; PVinT (Bu) 158, 1ff.)
(1) 例えば次の様に論じられる: 所取相は青, 黄等の多くの部分から構成される, その部分は互いに他と対立する性質 (viruddhadharma) を持つ, そうした部分からなる所取相が単一ではあり得ない……等と。
(2) 例えば, 唯識二十論に見られる極微批判を用いて, 次の様に論じられる: 知の所取相が多くの部分から成り立つとしても, その部分は極微 (paramāṇu) にまで分析される, その極微は外界の極微と同質であるから, 粗なるものを構成するのに, まず同時に六極微が結びつくことに

なろう、しかし極微自身は部分がないとの前提からすれば、結びついた六極微はすべて一つの極微に凝縮されるので一つの極微と同量となり多数の部分を構成できない (cp. 唯識二十論 12 偈) ……等と。

また知の諸極微が粗大な形相 (sthūlakāra) として感受されるとしても、その様な形相は単一なる知には存せず、又知の個々の極微 (非一なるもの) にも存在しない……等と論ぜられる、cp. PVinT (Dh) 183b^{6ff} (PVinT (Bu) 158, 3-4)。

- ⑥ Ratnākaraśānti は、唯識説でしかも知の形相は知と全く反対に非実有であるとの説、を主張する⁽¹⁾。従って彼にとって有形相知識説——「青等は、増益されていない (anāropita) あるいは (真) 実有 (vastubhūta) なる (?) 顕現 (prakāśa) と別でない故に、増益されないものまたは (真) 実有である」(MAIUp Ku 262b⁷⁻⁸) との説——は是認されない。例えば「[青等の] 形相は、偽 (alika) [とされて] も、顕現と区別のない (the mi dad pa) 故に、(真) 実有 (vastu) である」(MAIUp 263a⁹) との有形相知識説は批判される。その際 “the mi dad pa” について (a) 本性上 (真) 実有なる (dīos po'i rañ bzin du) 非区別、又は (b) 単に区別の無いこと (tha mi dad pa tsam) との二つの解釈が導入されるが、PrPUp (Ku 169a²⁻³) との比較によれば (a) は anāropitañ tādatmyam (b) は tādatmyamātram に対応する。即ち (a) は仮りに同一と見なされる同一性ではなく、本来的な全くの同一性と、(b) は同一性を意図しない区別の純粋な否定のみ、と解される。

1. (a) による有形相説——形相は、顕現と本来的に同一である故に、顕現と同じく (真) 実有であるとの説——に対して、形相の真実性を否定する Ratnākaraśānti にとって “形相が顕現 (→真) と全く同一” との部分 (→pakṣadharmatā) は認可されない、即ち論証因は不成 (asiddha) であると批判する (cp. MAIUp 263a⁹)

2. また (b) による有形相説——形相は、顕現との区別が否定されるのみである故に、(真) 実有であるとの説——に対しては、例えば所取や能取の形相は顕現との区別が否定されていても、分別されたものである故に (真) 実有とは言えない、即ち “顕現との区別の否定のみ” という論証因は、(形相の) (真) 実有性を必ずしも帰結できない (→不定 (anaikānta) である)、と批判する (cp. MAIUp 263a⁹)。ここで注目し値するのは次の点である。Ratnākaraśānti は 1. に於て “形相と顕現 (→知) との同一性” を否定する。一方 2. に於ては形相の (真) 実有性を批判するが “形相と顕現との区別の否定のみ” という事柄そのものを否認してはいない。同様なことが “顕現も、偽なる形相と区別がない (tha mi dad pa) 故に、形相と同様に偽となる” (cp. PrPUp Ku 170a⁶) という反論を批判する場合にも見られる (cp. PrPUp 170a⁶⁻⁸)。従って Ratnākaraśānti に於ては、形相と顕現 (→知) との関係について、両者の全くの同一性は否定されるが、両者の区別の否定のみ⁽³⁾ は間接的に認容される、と考えられる。これは同一性を排去し区別の否定のみを積極的に主張する Dharmottara の見解と内容的には異ならない。その意味で知の形相の捉え方に関して、Dharmottara 説が、形相の偽性及び非実有性を説く Ratnākaraśānti 説に接続する可能性がある、と言えるであろう。

- (1) Ratnākaraśānti の無形相唯識説については、以下の論文参照；梶山「Controversy」p. 34~37；海野孝憲「ラトナーカラ・シャーンティの形相説批判」印仏研 Vol. 24, No. 1, p. 470~p. 467；桂紹隆「A Synopsis of the Prajñāpāramitopadeśa of Ratnākaraśānti」, 印仏研, Vol. 25, No. 1, p. 482~484；沖和史「Ratnākaraśānti の有形象説批判」, 印仏研, Vol. 25, No. 2, p. 940~937；松本史朗「Ratnākaraśānti の中観派批判」(上) (下), 東洋学術研究 Vol. 19, 1~2 号, p. 148~p. 174 (上) p. 152~p. 180 (下)。

(2) 上掲松本論文 (下) p. 153; p. 170~171; 注 (21) に訳出。

(3) 上掲松本論文 (下) p. 172 に既に指摘されている。

- ⑥7 例えば Śubhagupta はこの点を sahopalambhaniyama 論証に対する批判として指摘する、cp. Bāhyarthasiddhikārikā 87 (=TSP p. 696, 11~12)；神子上「Śubhagupta (sahopalambha.)」p. 18 に訳出。

- ⑥8 cp. PVin I p. 100, 1~3.

- ⑥⑨ 戸崎「Pramāṇa.」⑧ p. 109; Vetter「Erkenntnisprobleme」p. 74 に訳出。
- ⑦⑩ cp. PVV p. 217, 12~14: *sautrāntikair iṣṭam bāhyam artham āśritya jñānasya dvairūpyam ācāryeṇa varṇyate. tac ca dvairūpyam sahasamvedananiyamāt... sidhyati,.... sahopalambhaniyama* 論証が経量部に立って立量されることは、戸崎「Pramāṇa.」⑧ p. 109 に指摘されている。
- ⑦⑪ cp. PV III 391d~392ab (戸崎論文 p.103~p.105 に訳出); PVin I p. 100, 8~10.
- ⑦⑫ cp. PV III 393~397 上掲戸崎論文 p.105~p.109 に訳出。
- ⑦⑬ cp. PVBh p. 416, 21; p. 416, 14~15; p. 413, 12~15 (virodha <iti> (?)).
- ⑦⑭ cp. PVBh p. 416, 22~24. Yamāri は、これらの言明によって能取相の anvaya と所取相の anvaya が示された、と捉える (cp. PVBhT (Ya) Me 406b²⁻³). それは次の意味であろう。前者の場合、例えば青ではなく黄なる所取相のみが現前して、能取相に把持される場合、能取の有が anvaya で、その時の青の非有が vyatireka となる。また後者の場合所取相が、苦ではなく楽なる能取にて把持されるとき、所取相の有が anvaya で、その時の苦なる能取の非有が vyatireka である。この様に所取(→対象)と能取(→知)とは常に一方の有のとき他方の非有 (anvavyayatireka) の関係にある故に sahopalambhaniyama は成立しない。これが反論の主旨である。

Text の読み: Tib. (The 95b⁷: ...rnam par śes pa rnam pa med pa *ñid* yin na de^{ci} tshe...) によれば Skt. は nirākāram <eva> vijñāna <m> tadā...であったか(??); [tadā] <tatra>; nīlavatyatirekeṇa pite sa evākāraḥ は Tib. The 95b⁷⁻⁸: ser po la sogs pa[r] med par ^{ci}dzin pa^{ci} rnam pa *ñid* yin la/ に相応しない (但し, sa (=grāhaka) eva は Yamāri 注 (Me 406b²) に引用される); (tad eva duḥkha-)ākāreṇēti cet に対して Tib. は The 95b⁸: (de *ñid* sdug bsñal gyi) rnam pas ^{ci}dzin pa yin no ce na/

- ⑦⑮ cp. PVBh p. 416, 26~27 (tadabhāve nānumānam iti...).
- ⑦⑯ cp. PVBh p. 416, 28~30.
- ⑦⑰ * (1) tad eva ca nīlam の tad は Tib. に欠。
- * (2) Tib.: rgyu <d>.
- * (3) 次の様な意味であろう: 他者の言う所取 (ノ能取) とは、所取 (ノ能取) 以外のものを排除した意味での所取 (ノ能取) であり、それは一般相としての所取 (ノ能取) である。その一般相を基にしてそれぞれ「所取」、「能取」と名づけられる相を知の相続上に位置づける。そこで所取相の相続と能取相の相続との区別が仮りに設定される。
- * (4) paramārtha <satyan> [satvan] (?) tu. Tib. では *der don dam par yod pa ni*.
- ⑦⑱ Ravigupta は sahopalambhaniyama 論証及び citrādvāita 説では Prajñākara の説を全面的に取り入れているので、両者は知識論的に同じ立場に立つと見なされる。

(1) 両者の関連については戸崎「仏教認識論」p. 31 に指摘される。

- ⑦⑲ cp. 拙稿「Devendra.」, II. A. 1., 補遺 * 1 (p. 35~p. 36).
- ⑧⑰ cp. 拙稿「Śākya.」, III. 尚 p. 156 の 15 行目 ([21]) の矢印は因果関係の意味であるが、訳文も文脈の内容を十分伝えていないので一郷正道先生の御指示により次の様に改める: 「[異熟識 (アーラヤ識) としての知は唯一であり、その] 異熟識 (vipākavijñāna) [のみ] を意図して [有情の唯一識相続 (→多数の知の同時非生起) が] 説かれたので、[従って諸転識 (pravṛttivijñāna) については、それらの同時生起が否定されていないので、転識としての多数の知 (青の知、黄の知等) が同時に生起することを認めても何ら] 矛盾にはならない」(PVT (Ś) 255b⁶⁻⁹). 御教示を心から感謝致します。

Yamāri は PVBh の注で諸処に Prajñākara. が Dharmottara 説を批判したと指摘している。今問題となっている知の形相の捉え方に関する議論では、これまで PVBh の範囲内で論じられた内容だけからは、その様に論難の関係を一意的に決めるまでには至っていない。例えば PVBh の sahopalambhaniyama 論証に於ては、「対象と知と区別の否定のみ」という解釈は表面に出てこないし、「区別の否定のみ」に止まらずに同一性こそが成立すべきだという必然性に関する議論もない。その点から

すれば Prajñākara. が対象と知との同一性を主張していても、“区別の否定のみ”という Dharmottara 説を意識してはいなかった様にも思われる。一方 Dharmottara. は“同一性”との解釈を知っていて、それを批判して“区別の否定のみ”でなければならぬと論じてはいるが、その場合でもその同一性が果して Devendra. (/Śākyamati) の説く同一性を越えてさらに Prajñākara. の場合まで含まれるかという点になると明瞭ではなくなる。この問題については他のテーマでの両者の論難をも考察しながら検討する必要がある。今後の課題としたい。

- (1) 例えば Yamāri は次の箇所で Dharmottara を対論者と見なしている。右端は対応すると思われる Dharmottara 説を示す

PVBhT (Ya)	PVBh	
Me 173a ^{7*1}	p. 229, 8~13	cp. PVinT (Dh) Dse 201a ³⁻⁴ (PVin II p. 2*, 13~15 への注)
Me 337b ¹⁻²	p. 345, 9~10 (cp. p. 351, 19, 22)	cp. NBṬ (Dh) (Dharmottarapradīpa) p. 83, 2~4
Tse 32a ⁷	p. 482, 31~p. 483, 2* ²	cp. PVinT (Dh) We 12a ³⁻⁶ ; 12b ⁵ ~13a ²

* 1 cp. 宮坂有勝「ダルマキールティの生涯」(上) 密教文化, No. 93, p. 64.

* 2 谷真志「Pramānaviśīṣaya III 解釈の問題 [1]」, 高知工業高等専門学校学術紀要 No. 18, 注 [25] に指摘されている。

Abbreviations

「Bemerkung」= Bemerkung zur sahopalambhaniyama-schlußfolgerung Dharmakīrtis und seiner Kommentatoren (岩田 孝), 印仏研, Vol. 30, No. 1, 1981.

「仏教認識論」= 「仏教認識論の研究」(上巻) (戸崎宏正), 東京 1979.

「citrādvaita」= 「《citrādvaita》理論の展開」(沖和史), 東海仏教, 第二十輯, 1975.

「Controversy」= 「Controversy between the sākāra-and nirakāra-vādins of the yogācāra school - some materials」(梶山雄一), 印仏研, Vol. 14, No. 1, 1965.

「Devendra.」= 「Devendrabuddhi の知識論」(岩田孝), 仏教学 No. 13, 1982.

「Dharmakīrti (citrādvaita)」= 「Dharmakīrti の《citrādvaita》理論」(沖和史), 印仏研, Vol. 21, No. 2, 1973.

「Erkenntnisprobleme」= 「Erkenntnisprobleme bei Dharmakīrti」(Tilman Vetter), Wien 1964.

JN = Jñānaśrīmitranibandhāvalī (Jñānaśrīmitra), Patna 1959.

NBhūṣ = Nyāyabhūṣaṇa (Bhāsarvajña), Varanasi 1968.

NKaṇ = Nyāyakaṇikā (Vācaspatimīśra), Kashi 1907.

NKand = Nyāyakandālī (Śrīdhara), Gangānāthajhā-Granthamālā Vol. 1, Varanasi 1977.

NKum = Nyāyakumudacandra (Prabhācandra), 2Vols, Bombay 1938, 1941.

NVinV = Nyāyaviniśayavivarāṇa (Vādirājasūri), 2Vols, Jñāna-Piṭha Mūrtidevī Jaina Granthamālā, Sanskrit Grantha No. 3, No. 12, 1949, 1954.

MAUp = Madhyamakālamkāropadeśa (Ratnākaraśānti), 北京版, No. 5586.

「Pramāṇa.」= 「プラマナー・ブールティカ, 現量章の和訳研究」(8) (9) (戸崎宏正), 哲学年報 第40, 41輯, 1981, 1982.

PrKM = Prameyakalamārtanḍa (Prabhācandra), Bombay 194/.

PrPUp = Prajñāpāramitopadeśa (Ratnākaraśānti), 北京版, No. 5579.

PV III = Pramānavārttika (Pratyakṣa) (Dharmakīrti)

PVBh = Pramānavārttikabhāṣya (Prajñākaragupta), Patna 1953.

PVBh(Tib) = PVBh の Tib. 訳, 北京版, No. 5719.

PVBhT (Ji) = Pramānavārttikālamkāraṭīkā (Jina), 北京版 No. 5720.

PVBhT (Ya) = Pramānavārttikālamkāraṭīkā Suparīśuddhināma (Yamāri), 北京版, No. 5723.

- PV-k = Pramāṇavārttika-kārikā, ed. by Y. Miyasaka, インド古典研究 II, 成田山新勝寺, 1971~1972.
- PVin I = Pramāṇavinīścaya (Pratyakṣa) (Dharmakīrti): 「Dharmakīrtiś Pramāṇavinīścayaḥ」 (Vetter), Wien 1966.
- PVin II = Pramāṇavinīścaya (svārthanumāna) (Dharmakīrti): 「Dharmakīrtiś Pramāṇavinīścayaḥ」 (Steinkellner), Wien 1979.
- PVinṭ (Bu) = Tshad ma rnam par ṅes pa'i ṭika Tshig don rab gsal (Bu ston rin chen grub), The collected works of Bu ston, Vol. 24, 1965~1971.
- PVinṭ (Dh) = Pramāṇavinīścayaṭīkā (Dharmottara), 北京版, No. 5727.
- PVinṭ (Jñ) = Pramāṇavinīścayaṭīkā (Jñānaśrībhadrā), 北京版, No. 5728.
- PVSV = Pramāṇavārttikasvavṛtti: The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti, the first chapter with the autocommentary, Roma 1960.
- PVṭ (R) = Pramāṇavārttikaṭīkāyām ṭṭīyaparivarta (Ravigupta), 北京版, No. 5722.
- PVV = Pramāṇavārttikavṛtti (Manorathanandin), Varanasi 1968.
- 「Sahopalambhānīyama」 = 「Sahopalambhānīyama」 (松本史朗) 曹洞宗研究生研究紀要, No. 12, 1980.
- 「Śākya.」 = 「Śākyamati の知識論」 (岩田孝), フィロソフィア (早大哲学会), No. 69, 1981.
- SiVinṭ = Siddhivinīścayaṭīkā (Anantavīrya), 2Vols, Jñāna-Piṭha Mūrtidevī Jaina Granthamālā, Baranas 1959.
- Skt. = サンスクリット。
- 「Śubhagupta (sahopalambha.)」 = 「シュバグプタの唯識説批判」 (神子上恵生), 南都仏教, No. 48, 1982.
- SyVR = Syādvādaratnākara (Vācivedasūri), Poona vīrasaṁvat 2453.
- Tib. = チベット語。
- < > = 補われるべきテキストの部分。
- [] = 原文 (Skt. と Tib.) には除去されるべきテキストの部分：翻訳文等にては補遺。
- () = 説明。